
エースをねらえ？

蒼井 涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ースをねらえ？

【Zコード】

N6025C

【作者名】

蒼井 涼

【あらすじ】

勉強はできるけど、足が遅くてスポーツ苦手な少年の物語。スポーツじゃないけど、今時のさめた少年達にも熱い心はあります。

第1回

第一回

「受験の神様」なんていない。

特に中学受験なんて、向き、不向きでほとんど決まる。

俺は塾に行かなかつた。家庭教師もいなかつた。

親は熱心だつたけど、普通のリーマン家庭としては

高いお金払うのは嫌だつたんだろうな。

なんと虫のいい話だろうと、今は思つ。

でも、かなり熱心に勉強はみてくれた。

高校や大学受験じやないんだから、何とかなつた。とは思つ。

とはいひものの、今大学生の俺は、結局塾や予備校には行かなかつた。でも第1志望に現役合格だ。

向き、不向きがあるんだ。自慢してこりつもりはない。
何にでもある。

俺は、足が遅い。

だからサッカーやつたら、後ろの方でデフェンスしかやらせてもらえない。

しうがないよね。不向きなんだ。

「頭がいい」なんてのは幻想だ。

合格したんだから、みんなそれなりに「頭」はいいはずだろつ。

でも、やっぱり向き、不向きがあるんだ。

順番がついてしまう。

がんばつても、やり方間違えば結果は出ない。

でもやり方教えてもらつても、結局向き不向きがある。

親は子供を、子供は自分を知らなければならないんだ。多分。
少しでも早く。

とにかく、俺は全国でも有数の私立男子校に入学した。
それなりに誇らしかったし、うれしかった。

なにせ子供だから、男だけで6年間でことも深く考えなかつた。

入学してすぐに友達はできた。

授業やはじめての定期試験も、別にどうといふこともなかつた。
宿題はけつこう多かつたけど、それもなんとかこなせた。

相変わらず、足はおそかつたけど。

そんなこんなで、1学期が終わるころ、クラブ活動に参加する
時期が来た。

男子だけだから、とりあえず全員が運動部に入る決まりだつ
た。

実は、内心、野球部はどうかと思つていた。

足は遅かつたけど、投げたり打つたりは得意だと思つていた。

(特に根拠はなかつたが)

しかし、野球部希望の連中を見て、すぐにやめた。

スポーツやらせたら、何でもOKといつぱりばかりだ。

これはいけない。

そんな時、一番気の合ひ坂本が言つた。

「テニスやらないか?」

「てにす?」

「いや、テニス」

何で、テニス。と思ったが、すぐに気が付いた。

テニスなんて、小学生の頃からやつてるやつなんて、そつはい
ない。

ましてや、受験勉強ばかりやつてきたやつばかりだ。
テニスならみんな同じスタートラインだろ？
足がおそいのも関係ないだろ？（これは大変な間違いだった
・　・　・）

即断した。

「やろう」

いうして、俺の本当の十代の物語が始まった。

第2回

学校は小高い丘の上にある。

電車を降りてから、ゆるやかな坂道を
15分くらい歩く。

中学部、高等部の生徒がまじりながら
ざわざわと歩いていく。

男子校なので、はなやかさは全くない。
甲高い笑い声や、会話もない。

静かなものだ。

夏を迎えて、早く登校するよつになっていた。
少しは涼しいからだ。

すると、毎日同じ電車になる上級生に気が付いた。
同じ制服だが、あきらかに高等部だ。

テニスバッグを担いでいる。

俺は中1としては背が高い方だ。170cmはある。
身長は負けていないが、厚みが違う。

なんか、かしこそうにも見える。

それよりなにより、いつも決まった女子高生といふ。

俺は俗に書つ「晩生」で、女の子にはほぼ無関心だった。

それでも、可愛い子だと思つた。

ただ、彼氏と彼女という風には見えなかつた。
時々、小声で話はしていただが笑顔がない。

特に当の上級生の態度はよろしくない。

自分からはほとんど話しかけない。話す時も

めんどくせやうだ。

俺たちは先に降りるのだが、彼女?に会釈もしない。さすがに、いかがなものかとは思っていた。が、俺には関係ない。

ただ、何となく気になっていた。

そのうち、その上級生の名前が市村だと知った。テニス部の説明会に、キヤプテンとして来ていたのだ。その上、実は県大会でも上位に入る実力者と知った。そんな人もいるのか。

なめていた俺は少し驚いた。

「お前、市村さん知らないのか?」

坂本があきれたように言った。

「いや、前から知ってるよ。」つそじやない。

「じゃ何でビックリしてんだよ。この前、朝礼で紹介されてたろうが。

市の大会優勝。

俺は何をしていたんだ?立つたまま寝ていたのか?

「おお、そうだったよな。遠くてよくみえなかつたのかも」

そういうと、坂本はフンと鼻を鳴らして

「俺が背が低くて、列の先頭なんでよく見えた、と言いたいのか」と言いつてるんだ。

「まあそうだ。」

「けつ。卒業する頃には見下ろしてやるからな」

無理だろ?お前の両親、今の俺より背が低かつたぞ。

しかし、部活始まつたら、間違いなく見下される。

運動に関しては、すべてにおいて坂本に勝てない。でも、いいやつだ。正直でわかりやすい男だ。

それに、俺よりも女子への関心がはるかに高い。

一度、聞いたことがある。

「何で、男子校に来た？国立の付属に行けば良かったのに」

「言つた。抽選で落ちた。」

「そうか。」

「でもな、うちの学校、同じ系列の女子校があるだろ？」

「交流があるらしいぞ。テニス部もあるはずだ。」

「そうか。野球やサッカーだと交流はないよな。」

「それが動機か？」

「もちろん、それもある。でも、親がテニスやつてるんだ。
俺も少しやらされた。けつこう面白かったよ。」

「なるほどなあ。正直な男だ。」

「そういうお前は何で？」

「お前が誘つてくれたから」

「そう答えると、坂本はうれしそうな顔してくれた。いいやつだ。」

第3回

テニスには、硬式と軟式がある。

中学の部活動として多いのは軟式だ。

コートは土でいい。ボールも安いし、安全だ。

しかし、世界でテニスと言えば硬式だ。

よく聞くワインブルドン、ローランギャロスなど全部硬式だ。

俺の学校も中学から硬式だ。

それがいいのか悪いのかはよくわからない。

結局、入部希望者は30人もいた。

コートは2面しかない。

多すぎると抽選になるかもしれない。

全員は入れたとしても、まともにコートで練習できるんだろうか？

などと心配していたが、杞憂だった。

俺のよう不安になった連中がかなりよそのクラブに希望を変え、20名になった。

もちろん、坂本と俺は勇んで入部した。

なにせ、練習は週3日。後は自主練習で、これは朝だけ。練習は夏休みから始まった。

とりあえずラケットは親父が遊びでやつてた頃のお古。

シューズはスポーツ量販店の特価品。

別に不満はなかつた。どうせ、レギュラーなんかなれっこないし。と、ネガティブな気持ちでスタートした。

坂本はラケットも新品。気合入りまくりだった。

ラケットの握り方から入つたが、案外すぐに打たせてくれた。

やってみると面白い。隣のコートで上級生が練習している。

うまい。先生は、いろいろ注意、指摘してくれるのだが、それよりも上級生を真似て打っていた。

一週間ほどたつたある日、先生が1年を全員集めて言った。

「一週間見てきたが、レベルに少し差がある。

今日から2つのグループに分かれて練習する。」

来たよ。また選別だ。でも仕方ない。

いつしょくたにやるには人数多すぎるし効率も悪い。

公式戦の団体戦メンバーは7名。補欠が2名。

最終的にはそこまで選別される。

下級生に抜かされることもある。狭き門だ。

坂本はレギュラーを目指す組に入れるだろう。俺は・・・

「西山、お前こっちだ。Aだ。」

言い忘れたが、俺の名前は西山健斗。

ケントって読む。親父がスーパーマンが好きで、俳優の

クラーク・ケントからとつたらしい。ありえない。

それはともかく、意外にも俺はうまい方の組に入った。

先に呼ばれたAの連中も意外そうに俺をみていた。
うれしそうな顔をしてくれたのは坂本だけだった。

その日から、急に厳しくなった。

Aチームは10名。微妙な人数だ。

間違いなく、俺が一番下手だ。

でも、スポーツで、なんらかの形で選抜されたのは人生初だった。
ドンジリでもなんでも、すごくうれしかったので
はりきつてがんばった。

朝の練習も、欠かさずやった。時々先生も見に来るし、アピールしないとね。（せこい・・・）

そんなんある朝、先生が俺を呼んだ。

「西山、ちょっと来い。」

やばい、Bに行けと言われるのかも。とおののきながら先生の所に行つた。

「はい・・・？」

「おう、毎日がんばってるな。

お前な、足が遅いよなあ。」

来たよ・・・。

「でもな、お前、人のフォーム真似るのがうまいな。」「ん？」

「それも才能だ。お前、サーブは誰かの真似してるか？」「どうやら、B行きチケットの話ではなさそうだ。

「ええ、市村さんの真似してみました」

「市村が。やつぱりな。でもな、お前には向いてない。

市村よりな、原口の真似してみる。背の高さを生かすにはその方がいい。それに原口はな、お前みたいに足が遅いんだ。だから、早いリターンを打ち込まれると追いつけない。それを防ぐために、まずサーブを磨いたんだ。それに、広いコートを一人でカバーするシングルスよりもダブルスのレギュラーを目指した。それが、大正解だった。今、原口と吉村のペアは県大会でも上位に食い込む。

お前もそれを目指したらどうかな。」

信じられない。つまり、俺をダブルスのスペシャリストに育てようとしてくれてるんだ！（誰もそこまで言つてないし・・・）

俺はあきらめもいいが、何でも都合良く受け止める性格もある。その瞬間から、俺はダブルスのレギュラーを目指すべく努力を始めた。

第4回

7月も半ばをすぎ、ハードコートの照り返しはようやく強くなっていた。

進学校などといふと、夏休みも宿題がたくさん出され、部活動なんてろくにやらない。と、思う人がほとんどだらう。ところが、高校受験がなく、6年間同じ学校で過ごすといつはある意味ゆとりがある。

大学受験なんて、中学1年の俺たちにははるか彼方のように思えた。みんな高校2年の秋の大会まではしつかり続ける。週に3日しか練習できないけれど、その時間の集中力はなかなかのものだ。

俺の所属するAチームは、夏休みも半日だがほぼ毎日練習がある。両親は意外だつたようだが、運動の苦手な息子がはじめて認められて楽しくやっている様子にうれしそうだった。まあ、1学期の成績もそこそこ良かつたからだが。

成績と言えば、坂本もすごい。数学はいつも満点近くとる。数学だけはかなわない。数学が大好きだといふ。まあ、これも向き不向き。

とにかくで、中学、高校の団体戦というのはシングルス3名、ダブルス2組で

1チームを組む。つまり、3勝すれば勝ち。

シングルスは、サーブ、ストローク、レシーブ、ボレーのすべてが平均以上でなければならぬ。その上で、エースがとれる武器がいる。

さうして、当然のことながら、広いコートを素早く動ける足もいる。

つまり、チーム内の上位3人が務めることになる。

中学1年でも秋には新人戦がある。小さな大会だが、デビュー戦だ。8月の合宿でレギュラー7名を決めるらしい。

俺はとてもシングルスでは太刀打ちできない。はじめからダブルスを狙っていた。

問題は、誰と組むかなんだ。というよりも、誰が組んでくれるかだ。そのためには、俺も何か武器が必要なんだ。ダブルスでこそ活ける武器が。

先生に言われて、まず原口さんを観察した。原口さんは高2でダブルス1。

つまり、1つ勝ちが計算できるペアだ。相方は吉村さん。小柄だが、とても機敏に動く。

原口さんがドーンとサーブを打ち込み、かえってくるへろへろ球を吉村さんが

スペツとボレーで決める。美しい。

吉村さんのサーブは原口さんのようなスピードはない。

しかし、かなりの回転のかかった球で相手も強くは打ち込めないことが多い。

何回かラリーになることが多いが、吉村さんが左右に素早く動き返しまくる。

そのうち、浮いた球が返ってくる。それを背の高い原口さんがなんなくボレー、スマッシュで決める。

すごい。

極端な言い方をすれば、シングルスは本当の力勝負。

でも、ダブルスは各人がオールマイティである必要はない。お互いの長所を活かせる組み合わせであれば戦える。

しかし・・・ととりあえずチーム内での順位戦なるものがある。

先生は言った。

「順位戦上位7名で団体戦に出る」

やばい。シングルスでは、誰に勝てるか？

2名には勝たなければならない。

長谷川、こいつには絶対に勝てない。中2のレギュラークラスといい勝負する。

高木、うーんこいつもうまい。体は大きくないが、ミスしない。

内山、足が速い。小柄だが、バネがある。拾いまくる。

佐々木、気が弱いのがたまに傷で、うまいのにミス連発することがある。うーん、微妙。

坂本、強い球打ちやがる。ベースラインで打ち合つたら勝てない。武田、一回勝つことがある。でも一回だけ。50回位負けてる。川村、こいつとは五分五分かな。可能性はある。でも川村も思つてるだろうな。

上村、物静かな男だが、持久力抜群。多分一番だろう。サーブが弱いのが狙い目だが。

鈴木、いい球打つんだけどミスが多い。チャンスボールほど力んでしまう。

まあ、確立からすると川村と鈴木と上村、それに俺の4人から2人が補欠に回る可能性が高い。

いや！それでは、物語にならんだろう！

面白くないだろう！

面白くしてみせるーと、根拠のない雄たけびを心の中でつぶやいた俺でした。

第5回

ところで顧問の先生は3人いる。

中学部Aの橘先生、Bの石本先生。

そして、高等部の熊田先生だ。

高等部Bには顧問がない。

同好会みたいなもんだからだ。

中学Bでも3年間やれば、そこそこ打てるようになる。
試合に出ても、まあかつて悪くない。

テニスは、その気になればずうつと続けられる。

一生の趣味にだってできる。大人になつてから始めるなどを
思えば基礎が身に付くから楽だ。

そんなわけで、楽しい雰囲気だ。Bは。

Aが面白くないというわけではない。

ただ、先生の目指すところはかなり高い。

正直、俺たちのような学校が毎日練習している学校に
そんなに勝てるわけないとthoughtっていた。

ところが、案外そうでもない。

まず、硬式をやっている学校が少ない。
つまり、競争相手が少ないのだ。それに、

団体戦で必要な7名のレベルがなかなかそろわない。
たいてい飛びぬけてうまいやつが一人二人はいるが、後はたいしたことない。

特にダブルスに力入れてる学校は少ない。

うまいやつは、学校外でテニススクールなどに通っている。
だから学校ではあまり練習しないわけだ。

実際、毎年団体戦では市の大会で優勝したりもしている。

そんな話を聞かされ、なんとなくその気になっていた。

女子もいないし、気が散ることもない。

きついけれども、充実していた。

そんな或る日、合宿があと10日に迫った日の朝。

午前中の練習日だったので、俺は朝早い電車に乗っていた。

「古川」古川」降りる駅だ。

と。そのとき、「西山」と声をかけられた。

振り向くと、原口さんだった。

「おはようございます。今日は午後からなんじや

「おお、そうなんだけど熊先に言われてさ。」

熊先とは、熊田先生のことだ。

「はあ。」

「ばか。お前にダブルス教えてやれとさ。

めずらしいぞ。早くからダブルス専門指すなんてな

「そうなんですか。でも、俺多分一番下手ですよ。足おそいし。」

「俺もそうだった。まあ、足は遅かつたけど、一番下手つてことは

なかつたけどな。」

高等部の熊先が俺を見てくれていたのか？それともタッチ、失礼、

まあいい。とりあえず、俺はうづもれではないわけだ。

橋先生が？

原口さんはこわもてだ。無愛想だし。でかいし、田つきこわいよ。

普通にしても、相手はビルだらう。普通にしてみろよ。

でも、話すと普通の先輩だ。

コートにつくと、まだ誰も来ていなかった。

「西山」サーブ打つてみろよ。」

「はい！」超ラッキーだ。

今まで、原口さんを目指して、いや、真似してがんばってきた。

今こそ成果をみせるんだ。

張り切つてベースラインに立つた。

一球、二球、三球、・・・

「西山、なかなかいい球打つな。」

「そ、そうですか？」

「ああ、俺のフォーム真似してくれたのは光榮だよ。でもな、やつぱりまるつきり俺と同じじゃまざいよ。」

「す、すみません」

「いやいや、真似したことが悪いわけじゃない。お前は俺より、手首がやわらかいみたいだ。だから、それを活かしたほうがいい。」

「手首？ ですか？」

「ああ。最後にスナップ効かせるんだ。もっと速い球打てるぞ。」指摘してくれたのありがたいが、いつたいどうすればいいのかわからないよ。

手本見させてくれたらなあ。真似には自信あるんだ。

すると、原口さんがボールを拾い上げ、俺に投げてよこした。

「投げ返せ、西山。」

「？」

「いいから。」

「いわれるままに、軽く投げ返した。

「コートの端に行け。」

いわれるままに、走った。

でも、これじゃ キヤツチボールだ。

キヤツチボール！ そうか！

「お前、速い球なげるようになつたな」

小学生の頃、親父がうれしそうに言つていた。
「最後に手首を開放するんだ。軽くなげてもピュッと行くぞ。」

「これだ。思い出した。投げた。」

「西山、それそれ。感じわかるよな！」

ラケットとボールが当たるのは一瞬だ。その瞬間手首が硬いままではいまいちボールにいきおいが出ない。力が伝わりきらないんだ。

ありがとー、原口さん！

ところわけで、俺のサーブは武器になった。

ようやく、少し自信がもてた気がした。これを磨くんだ。

サーブから試合を組み立てるんだ。

その日から、それをみてはひたすらサーブを打ち込んだ。

第6回

今日も暑い。

でも、学校での練習は休みだ。

先生が出張なのだ。

ところが、家にいる。宿題もやつておかなければ。

そう思っていたら、坂本から電話がかかって来た。

「練習しないか？」

「どこで」

「竜王山公園のパークがとれたんだ。」

「竜王山？ どこよ、それ。」

「地図で見る。学校に近いよ。」

「ふーん。誰がくんの？」

「俺の小学校以来の友達でさ、古川中行つたやつ。

スクール行つててさ、めちゃうまいぜ。」

「そんなやつ、相手してくれんのか？」

「ああ、教えてくれるつてさ。」

「ふん。まあいいか。俺より下手なやつと練習したつてしうのがない。（俺より下手なやつを探すほうが難しいけど……）

案外親は何も言わず、竜王山公園まで車で送つてくれた。フラフラと町に遊びに出るのはまじと思つたんだろう。

約束の3時にはまだ30分もあつた。

一人では何もできないし、公園管理事務所の休憩室で待つことにした。

自動販売機もあるし。涼しいし。

誰もいなかつた。

この暑いのにテニスする人間はいないってか。とれたわけだ。

ソファもひとりじめだ。

とりあえず、くつろいでいたが、ふと聞いたことのある声が聞こえた。

「あゆ、ほんとにやるの？ ちよーあついや。平田君、ほんとに来るの？」

「坂本君はそう行つてたけど？」

坂本？ んん？

声の方を見た。すると、知らない顔と何度も見た顔があった。

市村さんと電車に乗つてた女子だ。状況からすると、「あゆ」という呼び名らしい。

それより、坂本つて俺が待つている坂本か？

いかにも安直な設定だと思われるかも知れないが、こいつ事はある。

それより、中学生だったのか。市村さんといったから高校生だと思つていた。

関係はわからないが。もし中一なら、市村さんの彼女つてわけでもなさそうだけどな。

そなうなんだろう？ もし違うなら・・・

ただ、そこから話が飛躍するかはどうかは別なのだ。

だいいち、向こうは俺をまったく知らないし、知つたところどうりにかかるもんでもない。

そもそも、さきほどの会話から察するとこりが、平田とかこいつやつがお田当てなんだろう。

たぶん、坂本の友達でめちゃうまいやつなんだらう。

そんなことを考えていたのだが、どうも妙な気分だつた。

「西山、ほんとに来たな。」

誘つておきながら、何を言いつか。

「ああ、ひまだからな。早くやれりや。」

「おお。平田は来てるか？」

「誰よ、それ？」

「言つただろうが。めちゃうまいやつ。

俺が知るわけないだろうが。

「あつ、来た来た。平田！」

あいつが。小柄だけどな。

「ああ、坂本。さんきゅう、来てくくれで。

あ、東光の友達？」

俺の方を向いて言つた。俺の学校は東光学院といつ。

「俺、西山。下手だけど、よろしく。めちゃうまいらしいね」

「小学校の3年からやつてるからね。でも、坂本なんか

中学から始めて、けつこう手強くなつてゐる。そんなに変わんない

よ。」

なんだ、いいやつじゃないか。こじま、素直に教えを請つことにしてよう。

「いや、坂本はほんとうまいんだけど、俺はまだまだなんだ。

今日は、色々教えてくれよな。」

そこへ、女子の声。

「平田くん！久しぶり」あゆの方ではない女子だ。

平田くんは、少し驚いた様子だった。

「？田中？何でいるの？お前らもこじまテニスやんの？」

たなか、という名前か。坂本が、ぼそぼそと言つた。

「俺が誘つたんだ」

こいつか。

「うちらも、テニス部なんよ。平田くん、知つてるよ。この前のジニアで優勝したんでしょ。

教えてよ」

！なんたることだ。俺はどうなる。坂本め。

だいじめ、Jリーグの中で一番下手なのは俺だ。かつて悪口じゃないか。

「よし、時間すぎるわ。やあつやうつ

「ひひやうつ」

坂本が逃げるよつよつホールに向かつた。

第7回

まず、平田くんと坂本が打つことになった。

ウォーミングアップだというのに、坂本はバンバン打つ。軽く打つという事ができないのだ。

ああ、と思って見ていたが、気が付いた。

平田くんは、苦笑いしながら難なく、軽く返している。俺の学校じゃみんな苦労するのに。

力が違うんだ。

平田くんが本気で打つたらどうなるんだろうか？

「よし、じゃあ4ゲーム先取でもやろうか」
平田くんが言った。

あっという間だった。

平田くんのサービスゲームは、すべてファーストサービスで終わり。4本打つたら、ラリーはなし。坂本は足が速いから、何とか返すのだがネットさえ越えない。

逆に坂本のサービスゲームは、平田くんのリターンヒースで終わり。
4 - 0。

「やつぱり、強すぎ。お前。」

「ん~。まだまだだね。」

どこかで聞いたようなセリフだが、これは自分に言つたんだな。

平田くんと坂本は飲み物を買いに行つた。

あとには、女子一人と俺だけになつた。

「西山君も東光？」

「あゆ」ではない女子が話しかけてきた。

「ああ、うん。あんたらは？」

「桜花女子。あ、あたしは佐久本 美紀。」ひちは吉川亜由美。
「俺、西山けんど。」

「けんとお？」

ああ、いやだいやだ。何でこんな名前つけたんだよ。

「スーパー・マンだね。」

はじめて、「あゆ」が口をきいた。

「ううう時は開き直るに限る。」

「まあね。今の俺は仮の姿だ。」

くすりと「あゆ」が笑つた。

「あむか。」

ぐぐもとお。

と、その時、坂本たちが戻つてきた。

「あれ、何してんの？ 打てよ。時間もつたいないよ。」

「そうだよ。今度は女子、やつたり？」

俺はいつもやるんだよ。

「平田くん、教えてよ。球出ししてよ。つから一人打つからや。」

ふん。そういうことか。

「え、まあいいけど。」

と、言いながら、平田くんは「あゆ」をちらちら見てくる。

ふん。そういうことか。

「よし、わあやひつ。あゆ。いくよー。」

いけいけ。

そんなこんなで、目の前で臨時テニススクールが始まった。女子一人も、けつこいつやる。力で打つんじゃなくてスイングで打つて感じだ。

それにしても、平田くんの球出しがまご。
タイミングといい、強さといい。

うちの先生より絶対うまい。ほんとにラケットが腕の一部という感じだ。

「西山。平田はな、吉川のこと好きなんだぞ。」
わかつてゐるよ。

「へえ、やうなんだ。」

「ああ。でもな、平田のひと好きなのは吉川じゃなくて佐久本なんだ。」

わかつてゐるつて。

「へえ、つまらないかなあ。」

「やうだ。」

「で、お前もあゆが好きなのか」

「あゆってなれなれしく呼ぶな！」

おつおひ。図星かよ。

とこりひとは、ここには、片思いのすれ違いばかりが集まってるわけか。

それはそれで面白いな。

「じゃ、俺はどうすればいいんだ？」

「お前? 知るかよ、そんなこと。お前、好きな女子いないのか?」

「いない。だいいち、女子と知り合う機会ないし。関心ないし。関心もたれないし。」

「はあ? ばかか。お前。俺たち男子校だぞ。それも6年間。

このまま大学生になつてのいいのか? えらいことにになるわ。」

えらいことつてなんだんよ。わけわからん。

と、不毛な会話をしていたら、臨時テニススクールが終わったようだ。

「お待たせ、西山君。坂本と打てば?」

「ああ、坂本、やうづぜ。」

「よしあ

軽くラリーした後、といつても、坂本相手はつかれるけど。
4ゲーム先取をやることにした。
まずは、俺のサービスからだ。
いくぞ、手首の開放だ！

第8回

亜由美は楽しんでいなかつた。

必死で勉強して桜花女子に入つた。

友達もすぐできた。授業だつて小学校のようにザワザワしていなし、先生だつて全然違う。塾はただ受験に成功するだけの授業だつた。毎日、学校に行くのが楽しい。

でも、何か足りない。何だらう。

今、目の前で球を打ち合つている東光の人だつて同じじやないのかな。でも、楽しそうに見える。

ただ、テニスが好きなんだろうか。

隣で平田君と楽しそうに話している美紀だつてそう。確かに平田君はかつこいい。性格だつて悪くない。

小学校の時からモテモテだつた。

私に気があるみたいなのも、何となく分かる。でも、なんか違う。

「あゆ、あゆ？」

「え、あ、なに？」

「なに、ボーッとしてんのよ。勉強できるくせに」

「か、関係ないでしょ。別にボーッとなんかしてないよ。

あ、それよりあの今打つてる坂本君の相手の人、誰？」

「なに、気になんの？あのが？」

あれがは失礼でしょう。でもまあ、間が悪いので言つただけだけど。

「西山君だろ？中学入つてから始めたらしいよ。背が高いし、いいサーブ打つし。

運動はさっぱりとか坂本が言つてたけど、そつは見えないよなあ

「そう？なんかどんくさそう。ばたばた走つてるし。」

美紀は、ストレートすぎ。確かに左右、前後の動きは坂本君に比べると・・・

「ん。シングルスは厳しいだろ？な。でも、あのサーブとボレーはうまいよ。

ダブルスなら行けると思うよ。」

「ふーん。でもまあ、平田君とはレベル違いすぎ。」

「テニスはね。でも、頭なら西山君の方がはるか上だし。」

「東光だから？」

「それもあるけど、実は俺、西山君知つてたんだ。」

「へえ、そうなんだ。思わず聞いた。」

「でも、ちがう小学校だったよね。なんで？」

「うん。西山君、俺が通つてた塾の毎週日曜のテストだけ受けに来てたんだ。」

「日曜だけ？なにそれ」

「俺は週に3日通つてた。東光行きたくてさ。でも全然だめ。で、テスト受けた次の日曜に成績返つてくるんだよ。でさ、いつも最初のページの、それも上の方にいたのが西山君だった。」

女子でいつも上の方にいたのが、吉川さんだつたよね。」

？！ そうか、いたいた。日曜のテストしか来ないのにいい点取る男子がいるって。

ケント！ そうだ、変な名前だつてうわさになつたんだ。そつか。あの男子か。

「へえ。頭はいいんだ。」

「そうだよ。東光でも成績いいらしいよ。これで、テニスも負けてたら

俺、立場ないよ。」

平田君は、そう言つて笑つた。いい人だ。全然卑屈になつてない。自分に自信持つてるんだろうな。

こういう男子、モテルはずだよね。なんでだろう、なのに私は引い

て見ちやつてる。

「さ、今度はあたしたちやう」

美紀が言った。

といふが。

「悪いけど、少しだけ、先にやらせてくれる?」
と、言いながら平田君がコートに走った。

? ? ?

「なに、平田君、どうしたやつたのよ。

でも、ま、いいか。平田君のプレー見られるし。ね、あゆ」

どりしたんだる。平田君。

「坂本、ちょっと変わってくれる?」

突然、平田君が乱入してきた。

「ああ、いいけど。西山ー平田と変わるからー
ボーボロにされる!」

言われなくともわかつてゐるや、ばかやうひ。やれやれ。
でも、平田君とやるために来たんだからな。
でも、本気ではやつてくれないだらうなあ。

「じめん、西山君。じゃ、お願ひします。」

「西山でいいから。じゃ、サーブ行きます。」

坂本には、そじやう通用するなど、どんなワターケれるか楽しみ
だ。

わあ、いくぞ。手首の開放だ!

第9回

フォルトだ。

でも、見たことのない回転だった。

意識してやつてるわけじゃないだろう。

今の球は、坂本とやつてる時にはなかった。

セカンドはどうだ？

！来た。

入れてくるだけだな。

これじゃあ、軽く抜ける！

「アウト！

なに？ねらいすぎたか？

いや、西山の足を考えてかなり内側を抜いたはずだが。

まあ、切り替えよう。

さあ、ファーストサービス、もう一度見せてくれ。

来た！

その瞬間、平田の視線から球が消えた。
次の瞬間、平田の右腕に激痛が走った。

「平田！大丈夫か！」

「あ、ああ大丈夫。」

平田にはわけがわからなかつた。確かにボールのコースを見切つたはずだった。なのに、ボディに来た。
バウンドしてからが見えなかつたのだ。

確かに速いサーブだ。でも、もつと速いのを打つやつはいくらでも

いる。

そういうサーブにだつて勝つて来た。なのに・・・
まだ、腕がしびれている。
くそ、・・・。

どうしたんだ平田は。確かにボディに行つた。（たまたま）
でも、俺のサーブなんかどうつてことないだろ？

「大丈夫か。」

「ああ、いいサーブ打つね。」

「そう？ 平田君に言われるとうれしいよ。」

「こりゃ、調子にのるな。」

せっかく少しいい気分なのに、坂本が水を差す。
まあ確かに、偶然とは言え、腕にあてちやつたしな。

「そうよ。平田君、これで冷やして。」

佐久本さんが、かいがいしくシップを平田の腕に貼つた。
それにしても、なんで平田は受け損なったんだろう。
そんなに、変な回転がかかつっていたのだろうか。

もしそうなら、意識して打てるようになれば・・・

俺は、不謹慎にもそんな事を考えていた。

結局、そのまま時間切れになつてしまい、解散となつた。

俺以外は、みんな同じ方向らしく、いつしょに帰つて行つた。

親父はなにしてんだ。買い物の帰りによつてくれるんじゃなかつたのかよ。

休憩所の自販機で飲み物を買つて、外のベンチに座つて待つていた。
と、その時

「西山君」

振り向くと、「あゆ」が立つていた。

「あれ、なんでいるの？」

「うん。お父さんが迎えに来るから」

「そりなんだ。」

意外な展開に、対応できない。

「西山君、私の名前覚えてない？」

なに？ 知るわけないだろ？

「え、今日ははじめてだらう？」

「K塾の成績表」

K塾？ テストの成績表か？

「K塾行つてたの？ えと、吉川さんだよね・・・」

K塾の成績表は男子と女子に分かれていた。

俺は女子の成績表はほとんど見ていなかつた。

「ごめん、思い出せない。」

「私は西山けんとつて名前思い出したよ。テストしか受けに来ないコースなのにいつも上位にいるつて、うわさになつてたよ。」

「へえ、そうなのか。これは喜ぶところか？」

「あ、ありがとう！」

「あゆ」はくすりと笑つた。

笑うところか？

「ごめん、笑うところじゃないよね。でも、なんでお礼いうの？」

「いや、とりあえず、名前覚えててくれたから。なんとなく」

「ふうん。ところで今日のサーブすごかつたね」

「いや、まぐれ。偶然。あれ、意識して打てたらなあと」

「そつか。でも、そのうち打てるよ。根拠のない応援でした。」

笑つてしまつた。

「笑うところ？」

しまつた。ミスつたか。

「ごめん。お礼をいつとこりか」

こんどは「あゆ」が笑つた。

やれやれ。俺は女子と話すのが苦手だ。何を考えているのかわからぬ。

「じゃ、またね」

突然、「あゆ」は去つた。お迎えが来たのだ。

「じゃ、また」

思わず、返したが「また？」

深く考えるのはよそう。ふつうの挨拶だ。また、電車で会つこともあるだらうしな。

しかし、その日から間もなく、また会つことになるとは思わなかつた。

坂本は考えていた。
西山のサーブについて。

なぜ、平田ともあろう者が受け損ねたか？
それもボディに受けるなんて、ありえない。

坂本自身、西山のサーブがそれほどのもんだとは思っていなかつた。
俺のときは、手加減してやがつたのか？

いや、そんな器用なことできるやつじゃない。
だいいち、そんな余裕かましてられる立場じゃないよな、あいつ。
レギュラー七人枠に入れるかどうかギリギリだもんな。
平田に聞いても、生返事しかしない。佐久本美紀もうるさいし。
だいたい、なんで吉川がいないんだよ。もっと話しあしたかったんだ
けどなあ。

「坂本？」

「おお、平田、なに？」

「送つてもらつてサンキュー。おばさん、ありがとうございました。

「あ、もう着いたんだ。じゃ、またやろ？ 直つたら。」

「ああ、じゃまたな。佐久本さん、また。シップありがとう。」

「ううん。じゃ、メールするね。」

ここりつ、平田のメアド、ゲットかよ。

平田一人が降りて、車はまた動き出した。

「お前の学校、携帯禁止じやないのか？」

「そんなの誰も守つてないよ。学校では一応電源切つてるし。東光
は？」

「もち、禁止。別にいらぬいし。」

「へえ～。持つてないんだ。残念ね、あゆのメアド教えてあげよう

と思つたのに」

「！」

「吉川の？吉川も携帯持つてるのか？」

「わかりやすいね、あんた。」

「な、なにを言つか。別にそんなつもりじゃない。」

突然、運転席のおふくろがケタケタと笑いだした。

「みつる、（俺の名前は満）あんたね、いい加減あきらめたり？？」

「え、おばさん、どうこう」と？」

「いら、お前ら、会話するなあ！」

「この子ね、ずっとあゆちゃんが好きなのよ。幼稚園から一緒にしよ。その頃から」

「んで、告白したの？」

今度は佐久本が俺に向かつて訊いた。

「んなもの、するわけないだろ？が。なんでもないんだよ。母さん、余計なこと言うくなよ！」

「はいはい。バカ息子さん。」

そうだ、俺は吉川亜由美が好きなんだ。でも、あいつ真面目だからなあ、変なこと言つたら、瞬殺じやないかと思つと、怖くて告白なんかできるかよ・・・

いつの間にか、西山のサーブのひとなど頭から消えていた坂本だった。

その頃、坂本など、まったく眼中にない亜由美は・・・いや、坂本だけではない、男子のことなど眼中にない亜由美は、やはり母親の運転する車で家に向かっていた。

「お父さんは？」

「迎えにこられて、すっかり忘れてビール飲んでんのよ、まったく。

「

「ふうん、お母さん、とばっちりね。」

「ふん、お父さんたぶん寝てるし、ケーキでも食べて帰らつか?」

「いいね、お母さん、私、ローズに行きたい」

「はいはい、お客様、ローズですね。」

ローズというのは、自家製ケーキの販売もしている喫茶店だ。
運良く、駐車場にも空きがあった。

母娘はいそいそと店に入った。
すると、そこに、西山がいた。

第1-1回

西山はお父さんらしき人とケーキが並んだショーケースを眺めている。

甘いもの好きなんだ。

「そ、席空いてるよ。畠由美」

母はさつさと店の奥にある席に向かつた。
び「しょひ、声かけようかな・・・

と、その時、西山が気が付いた。

「あれ、吉川さん」

「こんにちわ。久しぶり」

西山が笑つた。自分でもなかなかつまい冗談が言えた。

「お土産？」

「ああ、いや、家で食べるだけ。」

「ケーキ好きなんだ。」

「うん。好きだな。まだガキなもんで」

「お父さん？」

「うん。親父。そうちは？」

「お母さんと来たの。待たせるといつもセーから。またね。」

「ああ」

吉川さんは、そう言つて奥の方へ行つた。

なんかでき過ぎた偶然だなあ。

「おい、あれ誰？」

親父か。

「今日テニスで、いつしょだつた女子」

「ほお。」

なにが、「ほお」だよ。それ以上訊かないのかよ。

まあいい。別になんてことのない、偶然だからな。

しかし、その日から、何となく彼女のことのが心から消えなくなつた。

帰りの車の中は、相変わらずクラシックだ。

親父は中学生の頃からベートーベンやらモーツァルトやらが好きだつたらしい。

わからん。眠くなるだけだ。

でも、今鳴つている曲は聴いたことがある。

「これ、テレビでやつてた曲かな」

「そう。『のだめカンタービレ』だ。」

「なんて曲?」

「ベートーベンの交響曲第7番、第一楽章だ。元気でるだろ?」

まあ、はずむようなリズムで、明るい気分になるよな。

悪くない、と思つた。

「でもな、全部通して聴くと40分位かかる。」

ありえない。40分もじつと聴いてるなんて想像できない。やつぱり親父は少し変わつてゐる。

さ、帰つたら宿題だ。

「だれ、さつき話してた男の子」

「今日テニスでこつしょだつた男子。坂本君の友達。」

「ほお。」

「なにが、ほお、よ。」

「一ヒーカップを片手に母は、薄ら笑いを浮かべていた。誤解して
る。

「そんなんじゃないからね!」

「何も言つてないでしょ?」

「ただけど」

「東光なの?」

「そう」

「背が高くて、まあまあじゃない。」

「お母さんも、名前知ってるよ」

「え、なんですよ。誰かの息子さん？」

「K塾に行ってたの。日曜のテストしか受けないくせにいつも上位にいる男子つて、お母さんが先に名前教えてくれたんだよ」

「？・・ああ、いたね。誰だっけ、ええとね、言つたらダメよ。しつこいのはね、自分で思い出さないとボケちゃうのよ」無視して、ケーキを食べていた。やつぱり、ローズのミルフィーユは美味しい。

「けんと君ねー名字が思いだせない・・・」

「西山君」

「あ、何で言つのよ。そつそつ西山けんと君。あの子かあ、へえー。やつぱり東光入つてたんだね。」

「東光でも成績いいらしいよ。」

「だらうね。亜由美、あんた友達になったの？」

「今日ははじめてテニスしただけだから。でもまあ、また坂本君が平田君とか誘つた時には会うかもね」

「ほお」

だから、何が「ほお」よ。

でも何となく、西山けんと（どんな字かわからない）が心に残つていた。

好きとかきらいとかじゃない。と思う。だって、東光行って、まあ頭いいってことしか

知らないし。ま、いいか。帰つたら宿題だ。

第12回

「おそいな、鈴木は！携帯番号、誰か知らんのか！」タツチが怒っている。

いよいよ合宿なのだが、鈴木が集合時間に遅れている。参加するのは中学部の各学年のAチームだけだ。

俺は少し興奮していた。なんせ、一応選抜されてるわけだ。東光に入つてよかった。そしてテニス部に入つて良かつたと、心底思っていた。

「すいませ～ん。」

「こらー！今度遅れたら、無条件で補欠にするからなー。」

「はい！」

鈴木は直立不動で怒られていた。

そこへ、なんと市村さんと原口さん、それに熊先がやつて来た。タツチが言った。

「お前らの「一チだ。」

タツチの運転で、小型バスがスタートした。

俺は市村さんの隣に座った。みんな、敬遠したからだ。

市村さんは、もの静かな人だつた。今も、本を読んでいる。確かに、とつつき難いよな。

そんなことを考えていたら、突然、市村さんが口を開いた。「西山、時々電車でいっしょになつていたな」

気が付いていたんだ。

「はあ。」

「なんで、声かけない」

それは、じつちのセリフだらう、と言いかけたが

「す、すこません。お、の方ど」「しおだつたので」

俺は何を言つてゐんだ！

しかし、市村さんは笑つた。初めて見た。

「あほ。俺の彼女と思つたか？あれが？中1だぞ。

俺の妹の同級生だ。」

おかしい。じゃ、なんで妹がいなんだ？

「なんで、妹がいないのか、と思つたら」

にやにやしながら市村は続けた。

「妹はな、今入院してゐるんだ。あの子と同じテニス部なんだけど、
けがしちゃつてな。」

「おおきなケガですか？」

「いや、ただの骨折。たいしたことない。」

たいしたことない、ということはないだらうけれど。

「じゃ、吉川さんとは、別に・・・」

「？何で名前知つてゐるんだ？俺、言つたか？」

しまつた。いや、別にかまわんか。

「いや、坂本と同じ小学校とかで、この前、たまたまひょしょに練習
習することがあつたもんで」

「ああ、そういうや、うちの1年で知つてゐるのがこりるつて言つてたな。
坂本のことか。

まあいいや。桜花女子とは同じ系列だからな。そのうち交流会があるよ。」

「そうなんですか。」

「ああ、俺は妹が来るからいやなんだけどな」

市村さんて、けつこうしゃべるんだ。

それはともかく、ひとつ謎がとけた。謎つてほゞのもんでもないか。
でも、正直などいり、少しうれしかつた。

合宿は3日間。あつところ間かなと思つていたが、とんでもなかつ

た。

けつこつけつい。

最終日に、順位戦するらしいけど、俺、持つかな。
合宿所は毎年同じで、峰山荘という民宿だ。

経営者が東光〇Bで、格安にしてくれているそうだ。

俺たちの合宿中は貸切だ。

そりやそうだ。俺たちのようにきたないのがいつしかだと、
大浴場にほかのお客さんは入れないよな。

それをいいことに、合宿所ではほんとにノビノギをさせてもらつて
た。

2日目の夜、同じ部屋の坂本が言った。

「おー、ビデオ見よ!」

「ビデオ?」

「おお。百円で、10分だ。」

「…成人向けてやつか?」

「そうだ。」

「まずいだろ?、それ」

「なんで」

「なんであつて、先生入つてきたらびつすんだよ。」

「誰か見張ればいい。お前、最初に見張つてくれ」

同部屋の、ほかの3人もうなずいている。

これは、同調するしかない。

「わかつた」

とりあえず、入り口に近いところで外の気配を確かめた。
静かだ。これなら、ほかの部屋の扉が開いたらわかる。

「OKだぞ」

「よつしゃ、100円いれるが」

しかし・・・

「あれ、うつらないぞ。」

「おかしいな。100円入れたよな」

バンバンとテレビたたくやつもいる。

その音で気が付かなかつた。

いきなり、ドアが開いた。

「こら！」

タツチだった。

なんでわかつたのか。バレたのか。

「あのな、成人向け放送はな、おまえらみたいなのが泊まる時は中止してるんだ、ここでは。」

そういうことか。

「それにな、どの部屋で見ようとしたかわかる仕組みになつてるんだ。

社会をなめるんじゃないぞ。」

「先生、100円は返つてこないんでしょうか？」坂本がおそるおそる聞いた。

「当然だな。ペナルティーだ。誰が入れたかしらんが、全員で負担することだな。」

まあ、好奇心から見たいのもわかるがな、明日は順位戦だぞ。
しつかり寝とけ。消灯！」

大人への入り口は、まだまだ遠いのだ。

第1-3回

佐久間美紀は悩んでいた。

平田にメールを打つか否か。

あたしらしくない？

平田君はあゆに気がある。それはわかってる。でも、あゆはまったくその気はない。

なら、友達裏切ることにならないよね？

よし。ピッ。

今日はありがとうございました。また教えてね。

たったこれだけのメール、なんてことはない。

ただ、返信があるかどうかだ。

えい、もう打っちゃったものはしょうがないよね。

それより、あゆだ。

わざわざ、親に電話して迎えに来てもらつてた。なんで？坂本君の車に乗ればよかつたのに。

おかしいのは、

「親が来ることになつてるの」と、言つたあとで

家に電話したことだ。終わつたことを知らせていたんじゃない。

「悪いけど、迎えに来てくれる？」と言つてた。

わざと、残つた？なんで？

まさか、あのどんぐり君と話したいから？まさかね？

でも・・・

美紀は大変な誤解をしていた。

亜由美は父親と迎えに来てもらつ約束をしていたのだ。ところが、来れないとなつたので、母親に

「悪いけど、迎えに来てくれる？」と、言つたのだ。

電話したのは、終わったことを知らせるためだつたのだ。

悲しいかな、西山のことなど、その時点ではまったく頭になかったのだ。

が、この大誤解は美紀に勇気を与えていた。

これであゆに遠慮することはない！と。

時に、人には、自分で自分の背中を押す理由がいるのだ。

その大誤解の張本人、亜由美は机の前で宿題プリントを開いていた。生物が好きだつた。人間が不思議だつた。感情ってなんだろう。なんで、泣いたり、笑つたりするんだろう？

人の体を構成するものの中から、なぜ感情が生まれてくるんだろう？感情ってめんどくさい、と思う時さえある。でも、そう思うのも感情だ。

と、その時、携帯がなつた。

「もしもし」美紀だ。

「ああ、なに？」

「あのさ、あたし平田君にメールしたんだ」

「へえ、メアド、ゲットしたんだ。やつたじやん」

「でね、返事來たんだけどさ。」

「いよいよ、やつたじやん」

「それがさあ、最悪。」

「どうしたの？」確かにへこんでる。

「また、テニス教えてね、て打つたんだけどさ、返ってきた返事が
や、

『また吉川さんも誘つていっしょにやるうね』打つてさ。』

「ふーん」

「ふーん、じゃないよ。あたし、びうしたらしい？」

ああ、めんどくさい。感情つてほんとめんどくさい。
返す言葉もなく、黙つていると

「あゆ、平田君の」と、なんとも思ひこないよね？」

「うん。全然。」

「ほんとよね」

「ほんとだつて。」

「じゃあ、あのどそくわ痴せー。」

「どんぐわ痴~。」

実はすぐこの西山君のことだとわかった。でも、思わずと抜けた。
「今日来てた、坂本のともだちー。」

「ああ、西山君? なんで?」

「だつて、もしかして、なんか気になつてない?」

するどいなあ。なんで、わかるんだろう? でも、そんなんじやない、
と懶りんだけど・・・

「やつぱりー。」

「ちよつと、早合点しないでよ。あきれて口がきけなかつただけ
「ふーん。そおかなあ。ま、好みは人それそれだからね。
とにかく、あたしは平田君をあきらめないからね。今度、また
坂本使って平田君誘うから、絶対来てよね。」

坂本君はなんなの? なんかかわいそー。でも、そしたら、西山君も
来るかも。

「わかつたよ。せいぜいがんばってね」

「あ、突き放しーひとおー。ま、よろしくね、バイバイ
なんか、めんぐわこかど、少し樂しこ?」

いよいよだ。

今まで、サーブとボレーを必死で練習してきた。

ストローク戦では絶対に不利になる。

いいポジションで打てればそこそこやれる自信はある。
しかし、その自分がうまく打てるポジションに入る
足が俺はない。

サーブで崩して、ネットダッシュ、そしてボレーで決める。
抜かれたらあきらめる。これしかない。

ただ、それはファーストが入った時だ。セカンドの時にはどうする?
ラリーになる。相手を左右に振れるか?深い球が打てるか?

ああ、悩んでもしようがない。やるしかないんだ。

それに対して、初戦が長谷川とは。ま、考えよう。
負けて当然。ひきずる事はない。最初に一番強いやつとやるほうが
いい。

橘は楽しみにしていた。

今年は、面白いのがそろった。それぞれ個性がある。
実は、団体戦のメンバー構成の案はできていた。

番狂わせはあるか?

あるとすれば・・・

長谷川は考えていた。手ごわいのはいるが負けるとは思つていなか
つた。

どう勝つかを考えていた。特に初戦の西山には圧勝しなければ。
俺の強さを、全メンバーに見せ付けてやるんだ。
俺がエースなんだ。

これは、傲慢でも、自信過剰でもなかつた。事実、他を寄せ付けな

い強さがあった。

長谷川のシングルス1は規定路線だった。

そして、全員が注目する中、長谷川の初戦が始まった。1ゲーム、6ゲーム先取。橘も西山が1ゲーム取れるかどうか、と思っていた。

しかし、予想外の出来事があきた。

まず、サーブを取った西山がいきなりゲームを取つたのだ。それも、サービスエース4本で。ありえない事だった。

西山が最初に打つたサーブに、長谷川がまったく反応できなかつた。

いつのまに・・・

橘は自分の不明にあきれていた。確かに西山はよくサーブの練習をしていた。

なかなか速いサーブを打つようになつていていたようだつた。しかし、普段の練習ではみんな普通に返していた。

それが、今、目の前で見たサーブは全然違う。

速い上に、バウンドしてからのコースがとんでもなく変化する。長谷川といえども、1ゲームの中では対応できなかつたのだ。

よしよし、みんな驚いてやがる。本邦初公開だからな。
なんせ、あの平田が受け損ねたんだからな。

とにかく、慣れられるまでにできるだけファーストを入れ続けるしかない。

長谷川は動搖してゐる。今のうちこ、もしブレイクできたらなあ。

「フルト！」

案の定、長谷川のやつ、サーブが狂つてゐる。セカンドを深くリター
ンするぞ。

こうして、大方、いや、全員の予想を裏切つて、西山がリードする展開になつた。

さすがに長谷川も、途中からは氣を取り直して、自分のサービスゲームは何とかキープしていた。

しかし、西山がこのサービスゲームを取れば終わる。

まだ、西山のファーストサーブを一度も返せていない。そして・・・

「ゲーム、西山！ 6 - 3！」

なんと！ 勝ったぞ！ 長谷川に勝ったぞ！

まさか、ここまで通用するとは思つていなかつた。

秘密兵器にするつもりだったので、全員練習では打つていなかつた。逆に、どれくらい通用するのかもわからなかつた。ぶつつけ本番だつたのだ。

結果的には、大成功だつた。

まあ、次はやられるだらうけどな。

ただ、そううまくいくわけがないのであって、結局順位は10人中5番だつた。

けつこう負けた。疲れてくると、ファーストの入りも悪くなる。

それに、あとから当たるやつは、みんなかなり下がつて待つようになつた。

坂本なんか、なんとか当てて返してくる。まあ、それを俺が決めればいいんだが、

これがミスるんだな。

でもまあ、上出来だつた。とりあえず、7人のレギュラー枠に入つたんだからな。

大満足だつた。

長谷川もたいしたもんだ。結局、俺以外には全部勝つた。文句なく1番だ。

「西山」

タツチが、全試合終了後、俺に声をかけてきた。

「は」

「よくがんばったなあ」

「はい。秘密兵器つてのは姑息でしたが」

「いや、そんなことはない。今日にかける気持ちの勝利だと想ひついで。それより、お前、あのサーブ、誰に教わったんだ？」

「原口さんにヒントをもらいました。それで、たまたま、一度打てたんです。

それを何とか意識して打てないかと練習しました。」「

「そうか。原口ね。きのう帰った市村と原口にも見せてやりたかったな。」

「ですね。でも、俺は他がまだまだですから。サーブなんて慣れられたら返されますから。」「

「そうだな。あとは、セカンドを磨くことだな。とにかく、お前にはダブルスやつてもうひとつもりだ。夏休み明けには、誰と組むのがいいか、試してみるつもりだ。とりあえず、ダブルスの勉強しといてくれ。」「わかりました。」

よし、思い描いていた通りの展開だ。
しばらく学校での練習はないけど、また坂本とでも練習しどとかないとな。

「西山！」坂本だ。

「おう。」

「お前、やるな。平田に打つたやつ、マスターしたんだな？」

「ああ。俺はお前みたいに足速くないし、長じラリーじゃ勝ち田ないからな」

「なるほどなあ。自分をよくわかつてることか。」「

「そういうこと。それより、また竜王山で練習じよ。」

「やうだな。お前のサーブ殴ける練習したいし。」

「ああ、1本100円で打つてやるよ」

「けつ、なりリターンホールドとつたら200円じるが。」

「うして合宿は終わった。」

帰つたら、宿題だ。

二学期が始まった。

中学1年というのは、まだまだ子供だ。
と、言う人がほとんどだろう。

それは、単に先に生まれただけの者に言つ資格はないのだ。
誰でも、14歳を通る。その時の過ごし方が問題なのだ。
うまく行かないのが普通だ。もんもんとするのが普通だ。

急げてしまいたくなるのが普通だ。逃げてしまいたくなるのが普通
だ。

でも、結果として、何とかぐぐり抜ける。

自分の生きた14歳に自信をもてない大人が、14歳を子供扱いす
る。

長く生きればいいわけじゃない。どう生きたか。

校長の話は長い。いい話だが、何回目だ?

覚えてないんだろうか?

こういう時は、山を見る。

校舎の裏はすぐ山だ。生物部の連中は時々いろんなものを採集しに
入る。

俺らも時々ランニングで登る。

頂上まで登ると、実は桜花女子の校舎が見える。
双眼鏡持つて登るやつもいる。

俺も、今ならそつするかもな。

あれから、なんだか気になる。

道で桜花女子の制服見ると、ドキッとする。

俺も、ようやく芽生えたか?
でもなあ、なんかなあ。

今、俺が一番したいことはなんなんだろう?
よくわからなくなつて來た、今日この頃だ。
しかし、ああ、まあいいや。中学生なんて、非現実的なものだ。

それより！新人大会だ。

俺は気の合う坂本と組みたかったが、あいつ。

「俺はダブルスなんて、やだね。」

などと、あつさり言いやがつた。

そうなると、あとのメンバーからすると

4位、内山。6位、佐々木。7位、鈴木。

たぶん、内山とのペアが一番いいんだろうな。
すばらしく粘り強い。少々のことでは、抜かれない。
相手が根負けするのだ。

内山が後ろにいると安心だ。

ま、俺が選べるわけじゃないんだけどな。

ああ、早く本格的にダブルスの練習がしたい。

お、やつと話が終わつた。

その頃、亜由美は少し困つていた。

昨日、平田と坂本から電話を受けていたのだ。

それも、同じ内容の。

「吉川さん、今度、市のジュニア大会に出るんだ。見にきてくれないかな。」

「おう、吉川、今度さ、平田が出る大会があるんだ。よかつたらいいよに

見に行かないか？」

坂本君と行けば、平田君はどう思つだろ？
一人で行つて、坂本君と会つたら、どうなる？
どうちも、友達だ。私には。

でも、一人はそうは思ってないよね・・・

と、そこへ、カバンの奥で携帯が震えた。

「平田君の試合、見に行かない？」美紀だ。

これだ！救世主！

美紀に誘われて先に約束してたから、と言えば
どちらも仕方ないと思つてくれるだろう。

て、なんでこんなに気をつかわなきゃいけないのかな。
だから、感情つてめんどくさい。

それより、西山君は見に行くのかな・・・

なんか、気になる男子。んん、なんでかな。

よく知らないのに。だいたい、向こうはどう思つてるんだろう？

私のことなんか、全然気にしてなかつたら・・・

ま、いいわ。14歳の女の子なら普通よね。

花より、男子つてか。

本当に何かおきるなら、また偶然会つたりするよね。

平田君の出る大会、見に来るかどうか。

そこで、また会えば、何かおきる。

そういうことにしておこう。

なんか、楽しくなつてきた。

鈴木は、少し落ちていた。

なんで俺、あんなこと言つてしまつたんだろう。

俺が悪いのに。

昔から、そうだ。なぜか、人に指摘されたり、注意されると素直に聞けない。

つい、言い返したり、言い訳したりしてしまつ。

どうして俺はこうなんだろ？

せっかくレギュラー枠にすべりこんだのに。

どうしたら変われるんだろう・・・

事のところは、こうだ。

どういうわけか、橘はダブルス2に西山と鈴木を指名した。

全員が意外な顔をした。

西山はダブルス1ではないのか。内山も自分が西山と組むものと思っていた。

当の西山は、少し意外そうな顔はしたもの、

「鈴木、やるうぜ」と、声をかけた。

鈴木も、その時は西山に笑顔で応えていた。

その後、シングルスマンバーとダブルスに別れて練習が始まった。

ダブルス1は内山、佐々木。

西山はもう、サーブを隠さない。

次々とサービスエースを決める。

「また速くなつたんじやないの、すげえな。お前。」

サービスリターンに関しては、長谷川にひけをとらない内山でも悲鳴をあげていた。

しかし、それを見ていた鈴木は心中おだやかではなかつた。

自分には武器がない。俺のサービスゲームばかりが破られてしまう

んじやないか？

まあいそ、これは。

そんな風に思い始めると、鈴木の良さである思い切ったフォアハン

ドも、

いまいち自信のないサーブも、力んでしまってミス連発だ。

「おい、鈴木、練習にならないぜ。入れてくれよなあ」

佐々木が言った。

「あんまり力むなよ。練習なんだしさ。」

内山も言ひ。

その通りなのだ。それにいつも言われることで、なんといつこと
はないはずだった。

なのに、

「どうも、ガットの張りが悪いみたいだ。ラケット変えるわ」

などと言つものだから、

「道具のせいにすんじゃねえよ」と、佐々木。

これで、切れてしまった。

「つるせえな、ガットだよ！それに、少しフォームを変えてる途中
なんだよ！」

内山も佐々木も、またかという表情になつてい。
ラケットを取りに行く背中で、内山が言ひた。

「西山、お前、ついてないな」

その後の練習は散々だった。

自分がいやになつていた。

終了後、一人そそぐれと学校を出た。

自分をののしりながら。

誰にも会いたくなかった。

ところが、駅に着くと、どういつわけか西山がいた。

「あれ、鈴木、お前電車だつたっけ」

バス停で、みんなと一緒にになるのがいやだったのに・・・
よりによって、西山か。

「あ、ああ。今日は悪かったな」つい、言ってしまった。いや、言
えてしまった。

「気にはんなよ。俺もけつこうミスったし。

それにしても、お前、力入れすぎだよ。

普通に打つても、十分な威力だろ?」

「そうかな。」

「そりかなかつて、それでお前レギュラーに入ったんだろう?
お前のフォアは、速いよ。ちょっと、あぶないけど」

西山。こいつはよくわからないやつだ。

でも、なんか気が抜ける、というか肩の力が抜けていく。
血の上つた頭が、スッと冷めていく感じだつた。

自然体。それが一番似合つやつだ。

妙になぐさめたり、はげましたりしない。

しかし、それがありがたい鈴木だつた。

第17回

平田は順調に勝ち進んでいた。

中学生相手に負けるわけにいかない。

小学6年生の時にも、中学3年生に勝った。

相手が小さいと、必要以上に力んでしまうものだ。

ただ、次にあたる佐藤というのは手ごわいはずだ。

今年、関東から転校してきた佐藤は、去年の関東ジュニアの地区大会で

優勝している。体も大きい。

平田は初めて対戦する相手をかなり警戒していた。

その時、ふと西山のサーブを思い出した。

見えたなかつた、あのサーブ。

すると、なぜか気が楽になつた。何を氣負つてるんだ？

中学からテニスを始めた同じ年のサーブを変え受けられなかつた。

そうだよな、俺なんかたいしたことないんだ。まだまだだねつてか。

平田は、もう怖くなかった。

いきおいをつけ立上り、コートに向かつた。

美紀はいらっしゃっていた。

亜由美が来ないのだ。もう、平田の準決勝が始まってしまう。最初から見る必要ないだろう、ということで時間決めたのに。もうおいて行こうと思つたその時、

「「めん！」亜由美だった。

「もお、なにしてんのよー早くー」

すでにゲームは始まっていた。

佐藤のサーブからスタートしていた。

スコアは？

なんと、0・40。いきなり、平田はブレイクチャンスを迎えていた。

「すごい。相手の人、おつきいのにね。」

「うん。それに、なんだか平田君、余裕あるよね」
佐藤のサーブは速かつた。美紀や亜由美の目には、とてつもなく速く見えた。

あんなサーブが来たら、逃げる間もないだろう。
なのに、平田は軽々返した。

ダッシュしてくる佐藤のサイドを見事に抜き去った。

結果は平田の圧勝だった。

美紀が平田に駆け寄つた。

「おめでとう！すごいね！事実上の決勝戦でみんな言つてたのに…」

「ありがとう。実は、西山君のおかげかも」
西山君？亜由美は思わず、耳をそば立てた。

「え？なんで？あのどんくさ君？」

相変わらず、美紀の西山に対する評価は超低い。

「いや、俺も実はびびってたんだけど。

一緒に練習した日に、西山君のサーブ受けられなかつた。
すごいサーブだつた。

あれに比べたら、佐藤さんのサーブは速いだけだからね。」

「なんだ。へえ。けつこうすごいんだ。

「でもさ、そんなにすごいんなら、なんで東光でダブルス2なのよ」
美紀の情報収集はすごい。なんで知つてるの。

「ダブルス2？そつなんだ。確かに西山君はシングルス向きじゃない。

でも、ダブルスはけっこう行けると思つよ。でも、2か。

東光の先生も考えたなあ。」

「何を考えたの？」

美紀が変わりに全部聞いてくれる。

「想像だけどね・・・団体戦ていうのは3勝すればいいわけだ。
もし、シングルスで2つ勝ちが見込めるなら、力の落ちるダブル
ス2に

強いダブルスを当てたら確実だ。」

なるほどね。そういうものか。

「ま、来週の新人大会が楽しみだね。」

「そうか。私たちもがんばらないとね、亜由美。

平田君、応援に来てくれるよね？」

「ああ、今日来てくれたしね。西山君や坂本も応援したいし
と、いいながら亜由美を見る平田だった。

その頃、坂本と西山は市ジュニア大会会場によつやへ到着していた。どうせ平田は勝ち進むに決まっているだらう。

そんなに早く行く必要ないだらう。

などと、適当に時間を決めて来たのだが、次がもう決勝戦とは思つていなかつた。

「おい、やばかつたな。」

「ああ、でもやっぱり平田すごいな。」

自分たちのいい加減さの反省もせず、決勝の行われるセンター コートに向かつた。

センター コートだけは立派だ。

何年か前に国際大会が行われたため、改裝されていた。観客席がぐるっと取り囲んだコートは主役の登場を待つていた。ほぼ満員の観客の中には、今から試合をする2人に敗れた選手も多くいた。

その中には、準決勝で平田に敗れた佐藤もいた。

あまりの完敗に、自分のどこがいけなかつたのかさえわからなかつた。

このまま帰るわけには行かない、と思つた。

平田のプレーを冷静に、客觀的に見たかつたのだ。納得したかつたのだ。

そんな真剣に見つめる人間もいるといつのに、お氣楽な2人は（もちろん、SとNだが）

お互に気づかれぬように、亜由美の姿を目で探していた。

「あ、佐久本がいるぞ」

坂本が見つけた。

けつ、何が佐久本だと。探してたのはその隣だらうが。

などと心中で毒づきながら、先に発見されたことがくやしい西山だつた。

「どこ?」

「あれ、スコアボードの真下の席」

「お、いいとこ座つてんない」

「そりや、早くから来てたんだろ? お前のせいだぞ」「なんで、お前が早くから行つても暑いだけだ、なんて言つからだろ? うが」

「うるさい。出でただぞ!」

平田が先に出てきた。小柄だ。

その後、出てきたのは、なんと東光の先輩だった。

「なんで? 石川さん、準決勝で負けたはずだろ?」

坂本が言つと、隣の席にいたおじさんが言つた。

「準決勝の相手が、体調不良で辞退したんだ。特例で石川が進んだ。

「そうなんですか、ラッキーだなあ」

「人の不幸をラッキーなどといふな!」

いきなり、しかられた。よく見ると、東光の物理の先生、澤田だつた。

「あ、先生でしたか」

「坂本、お前、注意散漫なやつだなあ。気づかんか、普通。」

先生、違つんだよ、こいつ吉川亜由美を探すの必死だつたからですよ。

「す、すいませんでした。」

「でも、面白いことになりましたね」

「ああ、石川のことだから、ただでは負けんだらう。何かやるぞ」「負けますか」

「ああ、普通にやれば勝ち目ないな」

そうだろうなあ。石川さんは3年でトップだが、相手が悪い。

でも、頭が良くて勉強でもトップクラスだ。何か考えているい違いない。

西山も期待していた。

が、期待は見事に裏切られた。

平田が強すぎた。

石川は色々しかけるのだが、まったく通用しない。逆に平田は実にオーソドックスな攻め方で通した。ラリーでも、ネットでも主導権を譲らなかつた。

6 - 3。

石川、だつてつまらないミスもなく、よく戦つた。しかし、スコア以上の差があつた。

西山はあらためてシングルスのトッププレーヤーのすごさを感じていた。

しかし、もしダブルスなら、とも考えていた。平田の良さを消す攻め方があるのではないか、などと厚かましいことを考えてみいた。

「おい、出ようぜ。じゃ、先生、失礼します。」

「お、まっすぐ帰れよ」

どういう意味だよ。ガキあつかいだな。ま、ガキだけど。

坂本は、佐久本美紀は絶対の平田のところへ行くと読んでいた。すなわち、平田のところへ行けば、そこに亜由美もいるはずだと。西山も読んでいた。坂本について行けば、その先に亜由美がいるはずだと。

目的だけは共通の2人は、すぐに結果を得ることができた。案の定、美紀は平田が着替えて控え室から出てくるのを待ち構えて

いた。

そして、その隣には所在なげに亜由美が立っていた。

「お前ら、来てたんだな」坂本は声をかける。

なんとしうじらじい、と西山は思つたが。

先に亜由美が気づいた。

西山君。会つた。何かがあるの……かな？

第19回

俺は考えていた。

坂本と平田は亜由美が好きだ。

佐久本美紀は平田が好きだ。

で、俺は？もちろん、亜由美の事が……

しかし、亜由美は？

それがわかれれば、この複雑？な連立方程式は簡単に解けてしまう。

しかし、こいつはできればすぐに解きたくない。

いや、解ぐのが少しこわい。

西山君が私を見る？

いや気のせいかな。

何かおきると勝手に思い込んでいた自分がバカに思えてきた。

と、うつむいた時、

「吉川さん」西山だ。

「あ、応援来てたのね。平田君すごいね」

「ああ、すごい。」なんか、ぶっきらぼう。

「でもね、平田君、言つてたよ。西山君のおかげかもつて

「え？」

「西山君のサーブの方がすごかつたって。」

「ああ、あの時の。ん。でもね、なかなか続けて打てないんだ。練習してるんだけどね。新人大会までに完成したいんだ。」

「ダブルスだつてね」

「俺にはシングルスは無理だから。最初からダブルスねらつてたんだ。」

「そういや吉川さんは？」

「私も、美紀とペアでダブルス」

「そ、うなんだ。」

「女子は今度の土曜日、男子は日曜日だつけ」

「そ、う、確、か。土曜日、応援に行くよ。」西山がさらりと言った。

「本、当、に、?」亜由美は、起きた、と思つた。

「うん。」西山は自分が言つた事に照れているようだつた。

といひで、ここまでなぜ坂本の邪魔が入らなかつたのか？
なぜ、西山が一人勝ちの状況になつたのか？

それは美紀のおかげであつた。

美紀は亜由美と西山が何とかなればいいと思つていて。
そうすれば、平田も亜由美をあきらめるだらう・・・。
坂本でもよかつたのだが、この際どちらでもかまわない。
で、うまく坂本と平田を足止めしたのだ。

坂本と平田は焦つていた。

気が付くと、西山と亜由美がツーショットになつていて。
なんたることだ！

美紀のお手当では平田だ。

じゃあ、俺はどうなる！と坂本は怒つた。
あぶれてるじゃないか！

西山のやううー！

中学1年といえども、色々大変なのだ。

その頃、新人大会の組み合わせ抽選が行われていた。

東光学院からは、顧問の橋が出席していた。

昨年の優勝、準優勝校は別のブロックに入る。

あとは抽選だ。

と、言つても参加は全部で10校しかない。

市内で硬式テニス部のある学校で団体戦が組める学校は限られているのだ。

「橘先生。どうですか？今年は

昨年優勝の修実学園の顧問、柳沢が声をかけて来た。

「いやあ、なかなか

余計なことは言つまい。

「うちには、今年も有望な1年が多く、選ぶのに一苦労でしたよ。うちでなければ、十分出場できる子がたくさんいます。」

相変わらず、嫌味なことを言つ。

「うらやましいですね。多分、その子達、うちも受験してたんでしょうねえ。残念です。」

これが、精一杯か。どうだ、柳沢。

実際、修実学園には東光学院を落ちて入っている生徒が多い。さすがに柳沢も、表情がこわばっていた。
しかし、最後に言い捨てた。

「そうですね。まあ、テニスくらいはうちで花持たせてくださいね。

是非、うちと当たるところまでいらして下さい。

心より、お待ちしておりますので。」

見てろよ、柳沢。と、言いたかった橘だが、

手元にある決定した組み合わせに目を落とすと現実が待っていた。

1回戦、青田中。去年2回戦で負けた。

もし勝ち上がつても、次は多分城南中。ここは昨年3位。万が一城南を破れてようやく準決勝。ここで当たるのは多分甲北大付属。ここは、近隣の県からも選手が入ってくる強豪だ。昨年準優勝。

柳沢、いや、修実と当たるのは大変なのだ。
ううん。うなるしかない橘だった。

第20回

私立の進学校というのは、当然のことながら授業の進み方が速い。

レベルも高い。

そもそも、生徒を選抜しているのだからそれでいいわけだ。

ただ、全員がついて行けるわけでもない。どんな集団でも必ず順位がつく。

小学校では勉強で人後に落ちることのない子供ばかりだったのが、入学してから自分の上には多くの人間がいる現実をつきつけられる。

問題は、それが単にテストの結果に基づく順番なのに人格まで順番がついてしまうかのように錯覚してしまう事だ。成績で下位に沈むと自分が否定されてしまつたように感じてしまう。それが、ほかの事にも影響を与えてしまう。

それでも、他に何か秀でているものがあり、それなりに存在感を示せれば自信が持てるものだ。

これは、学校間でも言えることだ。

スポーツで抜群の結果を残す学校は、それなりに自信とプライドがみなぎっている。

東光学院の一回戦の相手、青田中学はまさにそういう学校だった。私立だが、俗に言う進学校ではない。併設されている高校は多くのスポーツが全国レベルだ。

テニス部の強化は近年のことだが、めきめきと力をつけていた。

昨年、はじめて東光も破り、甲北大付属にも善戦した。
今年は何とか決勝まで進むことをねらっていた。

まずは東光だ。シングルス1の長谷川以外はたいしたことないはずだ。

青田中顧問の石田はそう読んでいた。

特にダブルスには自信があったのだ。

シングルスで1つものにすれば勝てる、そうふんでいた。
なのに・・・

計算通り、シングルスは2、3と取った。

あとは、ダブルスで1つ勝てばいい、楽勝だ。の筈だったのに。
いや、ダブルス1落としたのはまあいい。

こちらはあえて2に実力がある方をおいたのだ。

負けるはずはない、はずだったのに。

西山という選手のサーブだけでやられた。

すごいサーブだった。中学1年とは思えない。

終わつたあと、以前から知り合いの東光の顧問、橋のもとに
駆け寄つた。

「た、橋さん。」

「やあ、石田先生。いい試合でしたね。ありがとうございました。」

「いや、こちらこそ。それより、あの、西山という選手。

すごい選手ですね。」

「いや、サーブはね、いい球打ちます。確かに。

でも、中学入つてから始めたんですよ。他はまだまだです。」

「いやあ、それにしてもすごいサーブだった。」

「ええ、教えたわけじゃないんですがね。足はおそいし、不器用だし、

何か1つ人に負けないものを、と思つたらしく、サーブの練習は
よくやつてましたね。」

「なるほどねえ。さすが、東光さんだ。」

「いや、学校は関係ないですね。たまたま、あの子がそعدつただけで。

早くから、ダブルスで行けと進めてはいましたが、本人もその気になつたのが

良かったんでしょうねえ。」

まあ、こんなわけで西山はいいとこ取りで一回戦を終えた。鈴木も緊張しながらも、そんなに力むこともなくいいプレーに終始した。

2人にとっては最高のスタートとなつた。

西山はうれしかつた。シングルス2つとられて、結局自分たちの結果で決まることにはプレッシャーを感じたが、最初のサーブで調子に乗れた。

それに、なにより亜由美が応援に来てくれていた。ただ、いつものように

美紀があり、平田もいた。しかも先に負けていた坂本までいた。自分が

負けてプレッシャーかけといてにこにこ亜由美に話かけていた。なんてやううだ。

それはともかく、昨日のことを行ぎやつていない亜由美の様子にほつとした。

いきなりダブルフォルト。

「どんまい、あぬ」

美紀はいつものように笑顔で声をかけてくれた。

そうだ。まだまだ。

しかし、次のファーストも入らない。

トスが狂っている。そう、思つてしまつた。

実は、緊張で力が入つていただけなのだ。

それに気づいていれば、自然に修復できただろう。

おかしい、何とかしなければ・・・と思つてしまつた瞬間から
よりくるつてしまい、最後まで思い切つたサーブが打てなかつた。

結局、1回戦で敗退。

勝てない相手ではなかつた。

でも、これが実際の実力なのだ。

試合で出せる力が「実力」なのだ。

自分の精神力の弱さに落ち込んだ亜由美だつた。

美紀は何も言わなかつたが、腹を立てていただろう。

ごめん、美紀・・・

ごめん、みんな・・・

チームの足を引っ張ることのつらさを始めて知つた亜由美だつた。

「きついな、あれは。つらいぞ」

西山はつぶやいた。

「そうだな。可愛そうに・・・」

坂本もうなずいた。

「練習でできることが、実力じゃないんだよな。

試合で発揮できる力が問題なんだよな。」

「鈴木の気持ちも分かる気がするな・・・」

「え？」

「だつてそうだろ。練習でも鈴木がターゲットにされる。ねりつてたら

力んでミスるからな、あいつ。」

確かにそうだ。俺は別に気にしてないけど、鈴木もつらいんだろうな・・・

いや、鈴木だけのことじゃない。俺も同じだ。

俺の唯一の強みであるサーブが、明日、全然入らなかつたら。そうだ。2人が普段通りの力が出せるかどうかだ。

気持ちを強く、しかもリラックス。これだ。

具体的にどうすればいいのかはわからない。

でも、これに気づくことができただけでも絶対に違うはずだ。

ただ、落ち込む亜由美の姿を見ながら、不謹慎にもそんなことを考えていた自分に

気づき、いやになつた。

しかし、どんな言葉をかけたらいいのかわからない。

「おい、西山、行くぞ」

「あ、ああ。」

坂本は無頓着に亜由美と美紀の方に向かつ。

「おしかつたね！」

おしくない。2・6だぞ。

先に美紀が口を開いた。

「うん・・・ま、これで終わるわけじゃないしねー亜由美、もういいよ。元気だしなよ。

これ以上、あやまつてばかりいたら、あたしむごいよ?さ、着替えに行こ!」

「そうだよ。これが、スタートなんだから。」

思わず、西山は言った。亜由美が顔を上げた。

「スタート・・・か」

そうだよな。最初からうまく行くわけない。

西山君、言葉は少ないけど、心に響くこと書いてくれる。
やつぱり・・・

そのあと、亜由美は笑顔を取り戻した。

先生にはかなり小言いただいてしまったが、

「これがスタート」と自分に言い聞かせていた。

翌日、試合会場についた西山は鈴木を探した。

鈴木は壁うちをしていた。

「鈴木！早いな」

「おう。なんか、じつとしてられなくてや」

もう、汗だくなっている。

「あんまり、張り切るなよ」

「何言つてんだよ、勝ちたくないのかよ」

「勝つや。普通にやりや勝つさ。」

「え、えらい自信だな。どつからくるのその自信」

「そんなもんは別にない。たださ、練習でやつてきた以上のことはできないしや。

それよりさ、作戦考えようや。」

「作戦？」

「おう。と言つても、いつも練習でやつてたことの確認だけじな。」

「練習でやつていたこと?」

「ああ。お前、サーブ打つ前とか、相手のサーブに構える前とかのリズムあるだろ?」

「ん? あんまり意識していない。それは。あつたつけ?」

「あるよ。サーブの前にはボール3回バンドさせるとかそ」

「ああ、なるほどな。」

「舞い上がつたら、それ忘れんだよ。多分。

だから、ゲームの入りではそれをあえて意識してやるんだよ。
すると、力が抜けた。

実は、テニスのガイド本の受け売りだったが。
結果的には、これが良かった。

スマーズに試合に入ることができたのだ。
昨日の亜由美の姿を見たおかげだな。

心の中で、亜由美に感謝する西山だった。

第22回

東光学院は2回戦の城南中にも勝つた。エースの長谷川が不調でシングルス1を落としたにもかかわらず、あとを全部とった。

どの試合も接戦にはなったが、押し切った。西山と鈴木は1回戦突破で無駄な力が抜け、スコアこそ6・4だったが相手にブレイクを許さなかつた。

甲北大付属の監督、水沢は自校の試合は見ず、東光と城南の試合を見ていた。

長谷川以外はマークしていなかつた。
おそらく次の相手は城南とふんでいた。
といひが・・・

シングルスで2つは絶対とらなければまずい。
あのダブルス2は危険だ。
あのサーブが今の調子決まり続けるとおそらく勝てない。
何か策が必要だ。

何とか、リズムを狂わせる必要がある。
気持ちよく打たせていてはだめだ。
さて、どうするか・・・

水沢の頭はフル回転していた。

甲北大付属は1回戦、2回戦と圧勝していた。
あまりに相手との差がありすぎた。
あまり体力を消耗することなく勝ち上がつたことは
好ましいことではある。

ただ、接戦を制して自信をつけて来た相手とやる時に受身になってしまわなければ、の話だ。

さて、どうなるのか？

その頃、小さなアクシデントが起こっていた。

長谷川は右手首に違和感を感じていた。

城南中との試合中、バッくハンドで返した時に一瞬だが電気が走った。

長谷川のバッくはシングルハンドだ。

城南中のシングル1、川崎のフォアからの強打をその後バックでは返せなくなっていた。

他のメンバーの頑張りで勝ちあがることはできたが、もう勝てない。

いや、それどころか、試合に出ることも無理だらう・・・

「先生、すいません・・・」

橋はうなだれる長谷川に言った。

「まったく。なんで、そうなるまで、無理をしたんだ。まあ、お前に負担がかかりすぎだった。すまなかつたな。

しかし、大丈夫。みんな頑張るさ。

まだまだこれからだ。みんなを応援しに行くぞ。」

しかし、橋は悩んでいた。

どうチームを構成するのか。

何より、あきらめではないなかつた。

どうすれば甲北大付属から3つ取れるのか・・・

シングルス1は捨てるしかないか・・・
と、考えた瞬間、「捨てる」という言葉が心に浮かんだ自分に対しても怒りがこみ上げて来た。

負けるために試合する人間なんかいない。

なんて失礼なことを考えたんだ、俺は。

よし、勝つのが厳しいのは間違いないが、

絶対冷や汗を流させてやるぞ。

不適な笑みを浮かべる橋だつた。

メンバー交換表を見た水沢は少し驚いた。

シングル1、西山。

ダブルス2の選手じゃないか。

いいサーブを打つ。東光で、勝ちが読めるダブルスだらう。
それをあえて・・・なぜ・・・
しょせん、ダブルス向きの選手だ。どう見ても、
うちの角田の相手ではない。

橋はいつたい何を考えている?

「角田、まあサーブだけの選手だ。しかし、油断はするな」
「はい、どんなサーブか楽しみですよ」
しかし、その余裕は、消し飛んだ。

見えない。

確かに速い。しかも、バウンドしてからが見えない。
なんだ、これは?

角田は、テニスの試合で初めて恐怖を感じた。
もし、このサーブを続けられたら・・・
ブレイクするのは難しいかも知れない。

あつという間にファーストゲームが終わつた。

西山は、コートヒュンジをしながら笑いをこりえるのに苦労してい
た。

橋はこう言った。

「いいが、とにかくファーストを入れろ。

ブレイクなんか考えるな。

とにかく、キープし続ける。

相手のサービスゲームは、適当にやれ。」

適当にか。なんて指示だ。

まあ、まともにラリーなんかしようとするれば振り回されて消耗するだけだもな。

というわけで、角田のファーストサーブが入った時は動かないことにした。

セカンドの場合にだけ、思い切って打ち込むことにした。すると・・・

角田は、絶対にキープしなければといつ思いから慎重になりすぎていた。

それでも普通にやれば何と言つことはなかつたはずだ。しかし、精神状態がそれを許さなかつた。

それに、西山のプレーにも戸惑つた。

とにかく、ファーストは全くレシーブしない。

なんだ？何を考えている？

40 - 0。

とりあえず、あと一本決めればいい。

しかし、ファーストをわずかにはずした。すると、西山が少し前に出た。

ふん。セカンドだからうつてなめんなよ。

西山は当たればラッキーくらいと考えていた。

きた！

速さはないが、高くなれる。

しかし、西山は自分の身長に感謝した。

届く！

手首の開放だ！

フォアハンドでストレートに返した。
入れ！

西山のレシーブは、ネットにつめた角田のサイドを見事に抜いた。
しかし、わずかにアウト。

「ゲーム、角田」

これで、1-1。

ただ、自分のセカンドは打ちこまれる・・・
いよいよプレッシャーを感じる角田だった。

プレッシャーといつものほの心から生まれる。

ただ、角田の精神力は並ではなかつた。

素直に西山を認める事ができたのだ。

先生はサーブだけの選手だなんて言つてたけど

それだけじゃない・・・

頭もいいし、度胸もある。

そこから角田の力みが抜けた。

西山のファーストは相変わらず返せなかつた。

しかし、自分のサービスゲームは確実に取つていった。

西山のファーストが入り続ける保証はない。

チャンスを待つんだ。

ところが・・・

西山という選手は不思議なやつだ。

橘は妙におかしかつた。

あいつはプレッシャーなんてものとは無縁なんだな。

確かに西山のプレーには変化がない。

淡々とサーブを決め、キープを続けていく。

相手の角田はあきらかに力が抜け、いいプレーをしている。

西山もそれには気づいているだろうに・・・

おかしなやつだ。

さて、肝心の西山はと言えば。

ふん、うまいなあ。さすがだよ。

他の連中、早く決めてくれよな、まったく。

などと、心の中で毒づいていた。

というのは、準決勝からはシングルス1からダブルス2まで、同時進行なのだ。

すなわち、5試合が同時に行われ、早く3勝をあげた方が勝利、というわけだ。

西山は、自分の役目は負けないことだと考えていた。自分は他の連中が3つ勝つまで、粘ればいい。

ようは、時間稼ぎだ。

ここまで、うまく行っている。ついに6・6まで来た。

まだかよ、あいつら・・・

そう考えながら、チエンジコートの休憩でベンチに腰を下ろした。

「3つとれそうだ。後は気楽に行け。」

後ろから小声で橘がささやいた。

「そうすか。よかつたあ。じゃ、負けますよ、俺。」

「ああ、思い切ってやつこい。」

「ほい」

やれやれ、終わりにするか。

ここからは、練習だ。

角田は他の4試合の状況を知っていた。

3つ取れていない。2勝2敗なのだ。

俺が勝たなければ終わりだ。

しかし、あのファーストを入れ続けられたら・・・

この瞬間、角田は崩れていた。

再開後のサービスは角田からだった。

絶対に落とせない。

力が入ってしまった。

「フルト！」

ますい。

セカンドはコースを狙わなければ。

無理をする必要はまったくなかつた。

たとえ、返されてポイントを奪われても、次のポイントを取りればいいだけなのだ。

しかし・・・

「ダブルフルト！」

西山はもう粘る必要もないのに、リターンの練習をする位のつもりだった。

ところが2本ともはずされた。

なんだよ・・・まあ次は入れてくるだろ。

しかし、西山は気づいた。

角田のリズムが狂っている。

トスをする前、必ず3回ボールをバウンドさせるはずだが、やたら何回もバウンドさせている。

ふん。負けてショックを受けているんだな・・・

案の定、ファーストが入らず、セカンドにも力がない。

西山は思い切つてうちこんだ。

なにせ、もう勝っているつもりなので力みもなく振りぬけた。そしてみごとにリターンヒースをとつた。

やるじやん、俺。

けつこうにけてる？

これで勝負がついた。

ブレイクに成功した西山は、最後のサービスゲームを簡単にキープした。

いやあ、角田は相当ショックだろうな。

俺なんかに負けるとは思わなかつたろうな。
能天気にベンチに帰ると、坂本が

「やつたな！奇跡だ！」などとわめいている。

「まあな。否定はしない。」

「いやあ、俺と鈴木の急造ペアはダメだわ」

「また負けたのかよ。他の4人に感謝しろよ。」

「あ、他の4人？お前入れて4人だよ。」

「？、何、俺はおまけの勝ちだろうが。ダブルス1とシングルス2、
3で勝つんだろ？」

勝負についてからの試合だぞ」

「あ？お前、なに言つてんだよ。勝負ついたら、それで他の試合
は打ち切りだぞ。」

なに？そりやそうだ。もう3つとつてたんなら俺の試合は打ち切り
に・・・

！そつか！タッチは俺にうそ言つたんだな！

でも、何で？プレッシャーをかけたくなかつたからか？
そこへ橘がやつて來た。

「よお、西山。ほんとにサーブだけで勝つたなあ。」

「先生、よく言いますよ。俺、ヒーローじゃないですか
「まったくだ。角田はプレッシャーに負けたみたいだな。」

「そうすね。でもなあ、なんか間抜けだよな俺。」

「間抜けでもなんでも、勝つたにはちがいない。
よくやつてくれた。」

西山はうれしいような恥ずかしいような、微妙な気分ではあつたが。

もちろん、亜由美も見ていた。

最初は、角田のファーストをまったくレシーブしようとしない西山にあきれていた。

なんか、感じ悪いなーと思つていた。

しかし、一緒に見ていた平田はこう言つた。

「やるなあ、西山君。」にやにやしながら。

「なんで？相手に失礼じゃない？」

「まあ、そう見えるかもね。

でもね、相手に勝つために、いや、負けないために全力をつくす、てのはいろんな形があると思つよ。

「どうこいつこと？」

「西山君には悪いけど、多分まともにラリーしたら勝ち田ないよ。じゃあ、どうするか、だよね。

とりあえず、ファーストサーブは通用する。

なら、キープはできる可能性が高い。

キープできるってことは、負けないってことだよね。「

「そ、そうかな。」

「そうだよ。キープしてたらチャンスは来るもんさ。」

なるほどね。そういうものか。

そう言われば、何かそれしく見えてくる。

正直、西山がシングルス1と聞いた時は、かわいそうにと思つたのだ。

多分、こてんぱんにやられるんじゃないかな。

ところが、小憎らしいくらいの態度でプレーしている。

スクアは接戦なのだが、全然手に汗握るところ感じではない。

西山君で・・・天然？

結局、角田の自滅のような形で勝負がついた。

角田が気の毒に思えてきた亜由美だった。

一方的に、西山に軽い失望を覚えた亜由美だった。

そんなこととも知らず、西山は田だけ動かして
亜由美の姿を探していた。

いたんだけどなあ・・・

けつこう俺、やつたと思つんだけどなあ・・・

「こら西山。」

なんだよ、坂本かよ。

「なに」

「お前、またシングルスかな？」

「知るかよ。でもかんべんしてほしいよ。

もう無理。」

「なんで、角田に勝つたんだぞ。」

「あほ。あれはな、たまたまファーストがよく入って、
たまたまタツチが俺をだまして、たまたま角田がプレッシャーに
負けたからだ。」

「たまたまの3乗か」

「そうだよ。でないと、俺が角田に勝てるわけないだろ？」「

「まあなあ。でもレシープもけつこうにけてたぞ。」

「そうなんだ。なんか、力がうまく抜けてさあ。まああれもたまた
まだな。

それより、長谷川どうなんよ。」

長谷川の手首はテープニングでぐるぐる巻きになっていた。

「今回は無理だな、長谷川、残念だがな」

「いえ、しようがないです。それよりも西山でいくんですか？」

「いや、いかん。修実はたぶんシングルス1は捨ててくる。

今の試合見てたからな。やばいと思ってるはずだ。あのやつ

あのやつ、とはもちろん修実の顧問、柳沢のことだ。

「西山はな、シングルス2で使う。」

「シングルス2?」

「ああ。多分、柳沢はエースである自分の息子をシングルス2に使うだろ?」

「西山とはあてたくないはずだ。だから、あててやるのか。」

「よくわからないんですけど。」

「あんな、エースが負ける、あるいは、大苦戦するってのはな、チームの士気にかかわるんだ。うちにに対する苦手意識を植えつけてやるんだ。」

これから、何回もぶつかる相手だからな。今回だけの勝負じゃないんだ。」

「はあ、そういうもんですか」

「お前な、うちのエースなんだぞ。同じだぞ。」

まあ、今回はお前のいない東光に負ける、負けないようにしても苦戦するつてのは修実にとって屈辱なはずだ。」

「先生、大丈夫ですか? 柳沢先生と何かあつたんですか?」

別に何かあつたわけじゃない。ただ、気に入らない。

修実は確かに強い。それは、生徒が頑張っているからだ。生徒が偉いんだ。

それをあいつは、自分と学校のステータスとしか考えていない。

それが許せん。頭に血が上っている橋には、自分も西山を利用していることにまでは気が付けなかつた。

結果的にはそれが、とんでもない事態を招くことになるとも知らず・

柳沢はまさか本当に東光が上がつてくるとは思つても見なかつた。

エースの長谷川がいたにしても甲北大付属の勝ちは間違いないと考えていた。なのに・・・

それにまさかあの角田が負けるとは・・・あの西山という選手、なめてかかるとまことに。たぶん、決勝でもシングルス1で出てくるだろう。万が一ということもある。

といふわけで、橘の思惑通りの展開にはなつた。つまり、シングルス2で柳沢の息子は西山と対戦することになった。交換したメンバー表を見た柳沢は歯軋りしたがどうしようもない。

橘のやうつ・・・

さて、柳沢Jrは別になんとも思つていなかつた。角田ともやつたことはあるが、6・1で軽く勝つた。西山とかいうやつは初めてだがなんて事はないだろう。それより、親父のやつ俺が負けるとでも思つたんだろうか。それがむかつく。

こうなつたら西山をこてんぱんにしてやる。内心いきりたつJrだった。

さて、いきりたたれている西山だが、橘に抗議していた。

「先生、ダブルスに戻してくださいよ。」

「なんで。」

「なんであつて、いいだろうが。こんな時しかやれないぞ。

角田や柳沢とやれるなんていい練習になるぞ。」

「もういいですよ。じゅうぶんです。」

「いいが、西山。シングルスとダブルスが全然別物と思つてゐるようだが、

それぞれがいい影響を与えるんだ。絶対に無駄にはならんから思い切つてやって来い。」

「はあ。」

まあ、そんなふうに言つしかないわな。先生としては。やるしかないかな。

内心、相変わらずの西山だった。

といつより、亜由美の姿が見えない方が不満な西山だった。

これで西山が勝つたりするとあまりにでき過ぎなのだが。そうはいかない。

そもそも、柳沢Jr.は平田に匹敵する力を持つ。

平田は学校に軟式テニス部しかないため出でていません。この大会では相手がいないので。

かたや西山はサーブしかとりえがない。

闘争心にも欠ける。本来、力に差があり過ぎるので。

角田との試合では、「たまたまの3乗」がそろつただけなのである。

柳沢Jr.は角田を一蹴する力がある。

どうなることやら・・・と、一番思つていたのは西山自身だったかも知れない。

さて、その頃、西山に軽い失望を覚えていた亜由美はといえば。

西山を素直にほめる平田を少し見直していた。

すごい選手なのに、全然えらぶらない。

傲慢なところもない。

何考えてるかわからない西山君より・・・

西山にはあまりよろしくない展開ではあった。

しかし、西山以上によろしくないと思っていたのは佐久間美紀だった。

まずい。亜由美の関心が平田に向きかけている。とてもまずい。

でも、亜由美は親友である。
まずい！

段々、怒りの矛先は西山に向いていった。
まったく、あの天然！何してんのよ！

それぞれがそれぞれの思いをめぐらせながら決勝戦に集まつてきていた。

決勝戦はダブルス2から1試合ずつ行われる。
途中で一方が3勝をあげても、最後まで試合は行われる。
ダブルス2は以外にも、坂本・鈴木急造ペアが善戦した。
これで勢いがついたのは東光だった。
ダブルス1も大接戦となつた。

しかし、結果は修実の2連勝ではあった。
シングルス3の武田が負ければ終わりという状況ではあった。

ここでは武田が勝てば物語としては盛り上がるのだが、武田はあっさり負けた。

相手が悪かった。本来、Jrに次ぐ力を持つ
島田だったのだ。

これで修実の連覇は決まった。あとはおまけのようなものだった。

そこまでの展開は大方の予想通りではあった。

Jrも西山もそう思っていた。

ただ、チームの勝利のためというじばりがはずれた事が

二人に微妙な変化を与えた。

柳沢Ｊｒは自分の圧倒的な力を見せつけることしか頭になかった。

西山は天然お気楽に、少し、対戦相手への興味が湧いていた。

自分のサーブは通用するんだろうか？

期待半分、怖さ半分というところだった。

試合は静かに始まった。

コイントスで勝った西山は当然のことながらサーブをとつた。
力むことと無縁の西山は、ファーストサーブ4本で
最初のゲームをキープした。

すごいサーブだ・・・

柳沢Ｊｒは驚いていた。

さすがに表情がこわばっていた。

エンジコートですれ違った時、西山はそれを見逃さなかつた。
あんがい、いけるじゃん、俺。

第26回

柳沢Jrは考えていた。

あのサーブはやばい。

あれを入れられ続けるとやばい。

しかし、それは行くまい。

セカンドなら何とかなるだろ？

ただ、気に入らない。勝つにしてもいまいちかつこ良くない。
すでに団体での優勝は決まっている。

あとは俺の勝ち方なんだ。

どうする？

とりあえず俺もサーブにさわらせない。

柳沢のサーブは変幻自在だった。

コーナーぎりぎりにフラット、スライス、スピント同じ
フォームから繰り出してくる。

こりゃすごい。

西山は素直に感心していた。

やまかんで振つて当たればもうけものって感じだな。
試しに全部フォアに来ると決めて待つてみたが、
れっぽり当たらない。

やまが当たつてもまともに返せない。

こんな具合でお互いにキープし続け、4・4まで進んだ。

意外な展開に観客はざわついていた。

特に西山のサーブとそれ以外のプレーの落差には

笑い声さえ混じっていた。

しかし、意外な展開はそれだけではなかつた。

西山は気が付いていた。スピンサーブだけはトスが少し高い。高くはねはするが届かないことはない。まあスピンサーブだけ返せてもブレイクできるわけではない。しかし、多分、ビックリするだろう。

1本でいいから、何とか・・・と、待つていると・・・

来た！

その瞬間、西山の右手首は解放された。

西山の最大の武器は、手首の強さと柔軟性だった。体全体の力のすべてがラケットを通じてボールに伝わった。前進してきた柳沢のラケットが吹っ飛んだ。

柳沢にとって、ラケットをはじき飛ばされるなどありえないことだった。

屈辱だった。

平田にだつてこんな風にやられた事はない。大勢の前で恥をかかされた。

赤黒い怒りが全身をかけめぐっていた。ゆるさない・・・

一方、西山はと言えば・・・いやあ、当たつた当たつたぞ。最初で最後だらうけどなあ。などと、単純に喜んでいた。ヤマカンがたまたま当たつたと思つてくれていたらまたチャンスはあるかもな。そう思いながら、次のサーブを待つていた。

柳沢はもぢろんまぐれだと思つていた。

西山は背が高い。少しスピードが落ちる спинサーブだからたまたま当たつただけだ。

なら、もう一回当てさせてやる・・・それから・・・わざと、スピードを殺したスピンドルサーブを放つた。

西山はさつきよりもさらに打ちやすい球が来たことにかえつて力が入つてしまつた。

スイートスポットをはずしてしまい、レシーブは高く浮いた。

柳沢は見逃さなかつた。

ジャピングスマッシュ。

西山は、やられたと思つた。

が、次の瞬間、右手首に激痛が走つた。

「大丈夫か！」

ネットの向こうから柳沢が駆け寄つてくるのが見えた。

手首をおさえてうすくまつっていた西山は

「ああ、たぶん」といいながら

柳沢を見た。

すまないと誤りながら心配そうな表情の中に笑つている田が見えた。

わざとやつたな・・・

その瞬間、西山は痛みが引いていくように感じた。

こいつには負けられない。

絶対に負けられない。

俺は下手だけどテニスが好きだ。

いくら上手くたって、こんなことするやつには負けられない。

立ち上がった西山は、ベースラインにもどった。不思議と平静でいられた。

もう柳沢が怖くなかった。

どんなサーブが来ても返せるような気がしていた。

もつあのサーブは打てないだろ？・・・

このゲームをキープしたら俺の勝ちだ。

柳沢はそう考えていた。

かなりのダメージだったはずで、棄権すると思つたがな・・・

来い。返してやる。

柳沢はフラットサーブをはなつた。

来た！

体が自然に反応した。

手首をかばうような気は全然起こらなかつた。

何も考えず、体の反応するままにスイングした。

しかし・・・

ボールは前に飛ばず、ラケットは「一ト」に転がった。

激痛で頭がしげれた。

こりやだめだ。

さすがに意地だけでは無理だな。

今日はかんべんとしてやるか。

いつもの西山なら、ここで棄権を申し出でいただろう。しかし、何を思ったのかラケットを拾い上げ、ベースラインに戻つたのだ。

右手がだめなら左手があるじゃん。
左手でやってみよつ。

西山は右利きだ。普通ならこれは悪い冗談ではある。ただ、西山には稀有のフォーム模写能力があった。小学生の頃から、ボールはどうやらの手でも同じように投げられた。打つのも左右同じように打つ事ができた。遊びで始めた事だが、いつしか無理なくできるようになつていた。

テニスでもできるだらう。

この際、やれる事はなんでもやってやる。
それほど、気持ちが攻撃的になつっていた。

柳沢はにわかには気づかなかつた。

もう一本決めて、もう次のゲームでブレイクして試合を終わらせることを考えていた。
フラットをバックに決めれば終わりだ。

来た。

予想通りだ。速いサーブがバック側に来た。

西山の頭には自分のフォームを鏡に映した時のイメージができていた。

そのイメージを体に命令していた。

柳沢も含め、見ていた者すべてが驚いた。

ラケットを左手に持ちかえた西山が見事なレシーブをしたのだ。

柳沢は一步も動けなかつた。

まさか左利きだつたのか？

そんな・・・ばかな・・・

じゃあ、右手で打つっていたあのサーブは何だつたんだ？

左ならもつとすごいのが打てるのか？

これは大変な誤解だつたのだが、柳沢の心中に嵐が吹き荒れたのは間違いなかつた。

うまくいつたぞ。おどろいてやがる。

よし、とにかく行けるここまで行くぞ。

細かいコントロールは無理だが、何とか打てる。

来い。返してやる。

柳沢はどこにサーブを打ち込んだらいいのか分からなくなつていた。

とりあえずボディを狙うしかない・・・

しかし、これは西山でもわかることだつた。

ボディに来ることは予想していた。

そしてまた、左手からスライスで返し、思い切つてネットに出た。

これも柳沢の意表をつく結果となりミスを誘つた。

柳沢はパニックに陥つていた。

すでに団体での勝敗がついている上、故障した西山の善戦に観衆の応援はほとんど西山に向いていた。

柳沢は自分が狙つて当てただけに平静ではいられなかつた。続くサーブでは初めてのダブルフォルトを犯した。

ついに両者通じてはじめてのブレイクとなつた。

西山の5・4となつた。

しかし・・・

とりあえず、レシーブは左でもうまく行つた。
柳沢もビックリしたろうからな。

ただ、サーブはさすがに右のよつには打てないだろつ。

こんなことなら、練習しとくんだつた。

などと、西山は少し弱気になつっていた。

しかし、このまま負けられないという気持ちだけは沸々と湧き続けていた。

ベンチに戻ると、橘が声をかけた。

「お前・・・、面白いやつだな」

あきれたような表情でそう言った。

「でしょ？でもね、もうネタ切れですよ。

さすがにサーブは打てないですよ。」

「そうか？まあいいじゃないか。全部ダブルフォルトでも。十分柳沢を追い詰めてるぞ。遊んでやれ」

「そうですね。アンダーハンド打つてやろうつかな」「アンダーハンド？だめだめだ。」

「そうですね。最後は華々しく散りますか！」
とは言つたものの、さてどうしたものか。

ベースラインに立つた西山は、とりあえず頭の中でイメージしてみた。

鏡の前で何度も素振りをした・・・

あの鏡に映つた自分の通り真似すればいいんだ・・・

反対に映つた自分を・・・

鏡の向こうの自分は左で打つていた・・・

段々自分の体に脳に描いたイメージが伝わっていくのが感じられた。

そして、何の違和感がなくなつた瞬間。

トスがあがり、体がしなり、左腕がムチのよくなりました。

最後に左手首が開放された。

柳沢は一步も動けなかつた。

右で打つたサーブと全然変わらない。

その事実に完全に打ち碎かれていた。

その後、続けて3本のサービスエースであっけなく試合は終わった。

「西山、6・4！」

審判のコールと同時にコートの周囲からどよめきが起きていた。

両打ちの西山。

この日から、他校の選手からそう呼ばれるよになつたのだ。

準優勝した東光学院は、冬休みに行われる県大会でのシード権を得た。その大会で3位までに入れれば地方大会に進むことができる。これは、東光学院にとって初の快挙になる。

橋は心中、快哉をさけんでいた。

そして、このメンバーなら高校でも期待できる。

一度、喝を入れておくか。

より高いレベルを目指すためには気を引き締める必要がある。
しかし・・・

翌日、東光学院中学テニス部の面々は普段の生活にもどつていた。当然のことながら、全員が天狗になっていた。

中学生である。当たり前だ。ご褒美みたいなもんだ。

「俺たちって、いけてるよなあ」

「おお、見てた女子もみんな俺たちを応援してたよな」

そんなわけはないのだが、思い込みとは可愛いものではある。

試合に出たレギュラー連中は、始業前に廊下で嬉しそうにしていた。そこへ、西山がやつて來た。

「お前ら、何で朝練こないの？」

「へ？西山、今日も朝練したのかあ？」

「ああ、タッキーが放課後コートに集まれって言つてたぞ。」

「なんで」

「さあな。別に怒ってる感じじゃなかつたけどな」

「今日くらい、朝練さぼつたって、バチあたらないよなあ」

とか何とか言いながら、それぞれのクラスに戻つていったのだが・・・

なんかあるぞ。西山は思つていた。

タッキーは何考えてるのか分からぬこといろがあるが、

今日に限つてはっきりわかつた。

氣を引き締めさせるためだ。

うまく伝わるといいけどな・・・

そして放課後。

うまく伝わらなかつた。

朝練に来たのが西山一人。

橋には、実は好都合ではあった。

ガツンと渴を入れるちょうどいい口実になつた。

ここで、一度締めた方がいいと考えていた。

と、そこへ西山が入ってきた。続いて鈴木。

その後、5分ほど経つてから残りの部員が入ってきた。

「昨日は、ほんとによくやつた。」

まずは、ほめないとな。

「長谷川、ケガは残念だったがエースとしてよくがんばった。

他の皆も、持つてる力を全部出しつつていう気合がよく伝わってきたよ。」

西山以外は、二口一口している。鼻がふくらんでいる。「ううだ。
「しかし。」

橋は腹に力を入れた。

「まさか、満足してるわけじゃ ないだろ?」

来たよ、説教か?という表情に変わる。

「俺は、もつと上を目指してゐる。こんなもんでも満足してないだ。いいか、これで他からのマークは厳しくなる。今のまんまじやつぶされるぞ。」

教室から笑顔が消えた。

「なぜ、今日、朝練に来ない?そんな緩んだ気持ちでびりするの?
なぜ、もつと上を目指そうという気にならない?」

そこで長谷川が口を開いた。

「昨日の今日ですよ?いいじゃないですか。」

「今日も、修学は練習してゐる?お前に勝つた学校が練習してゐるんだぞ。」

そんなのほほんとした気分でどうする。ただ、楽しくやれたらいい、てやつは

やめり。もつともつと練習して、上を田端やつて氣になれないやつは、やめり。

全員の表情がこわばつた。

「いいか、練習量の多寡じゃない。短い時間でどれだけ集中してやれるかなんだ。

いい加減な気持ちでは勝てないぞ。」

よし、どうだ。引き締まつただろう。橘は思つた。しかし・・・

「やめます。」

長谷川が言つた。

「な、なに？」

「俺は、そこまでしてやる気ないです。学院に入ったのはテニスするためじゃないですから。」

俺は、楽しくやれたらいいですから。」

エースの発言は重い。

「長谷川いなんじや、団体戦勝てないよな・・・

それに、先生の言い方、なんか納得できないです。」

今度は内山が言つた。

予想外の展開に、橘は言葉が出なかつた。

長谷川が立ち上がり、続いて内山が立ち上がり、教室から出でていった。

続いて・・・坂本、佐々木まで。

残つたのは、西山と鈴木だけだった。

な、なぜだ？ そんな程度なのか？

確かに、うちの学校は進学に有利だからと入学していく。

しかし、部活動はそんな程度なのか？

残つたのは、奇跡のような勝ち方をした西山と、

ダブルスでしか使えない鈴木だけ。

しまつた、と思つたが後の祭りだつた。

エースの長谷川がやめた。

長谷川がいなければ団体戦で勝負にならない。
だから続けても意味がない。

負けると分かつてる試合なんて・・・
それに、所詮進学校の部活動だ。

楽しくやれればいいんじやないの？

しゃかりきになつても先は見えてるし・・・

そう思うのが普通かも知れない。

西山もそう思はないではなかつた。

しかし、やめるという気にはまったくならなかつた。

人は人。自分は自分。

俺はテニスが好きだから続ける。

仲良く遊ぶだけのためのものじやない、もはや。

そんなわけで、東光学院のテニス部は一気に弱体化した。
高校になると、一気に大会への参加校が増える。

中学では軟式が中心だが、高校では硬式も盛んだからだ。

その上、中学では学校に硬式がないため、学校外のテニススクール
などで

腕を磨いていた連中が高校の部活動に参入していく。

連戦連敗は当然のことではあつた。

しかし、東光学院高等部テニス部は意氣盛んだつた。
普通、高校2年の秋で引退する。

しかし、西山と鈴木にはそんな気はなかつた。

今後の後輩が夏休みを越えて伸びてくれば、秋の新人大会の団体戦では
勝負できると信じていた。

何とか、準決勝に進んで県大会から地区大会に進むのも夢ではないと

本気で思つていた。

顧問の橋もそう考えていた。

西山と鈴木のダブルスは勝てる。あとふたつ。
シングルスでふたつ。

テニスは他の球技のような団体スポーツではない。
すごい投手がいる、すごいエースストライカーがいる、といつわけ
にはいかない。

個人の勝利が必要なのだ。

だから、よりチームの足を引っ張るプレッシャーがきつい。
今、勝利が絶対に必要とされる立場になつた西山は
それをひしひしと感じていた。

しかし、それを楽しめる自分も感じていた。

たかだか高校の部活動、しかし、だからこそ中途半端じゃなくて
やるだけやらないと本当に楽しんだことにはならない。
幸い、鈴木もチームの中心になつたことでキレル悪癖がなくなり、
冷静にプレーをするようになつっていた。

1年の連中も早くから公式戦に出場できる喜びで元気だった。
負けても負けてもそれが力となつて行くのが実感できていた。
やれるぞ。西山は冷静に燃えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6025c/>

エースをねらえ？

2010年10月22日14時10分発行